
暗黒の天使達

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗黒の天使達

【Nコード】

N6686B

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

敵を東欧に求めた由忠とイーリス。目指すは姿無き怪物。二人の前に立ちふさがる巨悪。そして、二人の前に現れた少女達は一体！？今度は由忠とイーリスが主役です！

第一話 遭遇

その仕事は、簡単だと、誰もがそう思っていた。

都内の某ホテルで行われていた非合法品のオークション会場。

参加者は上に超が3つくらいつくような連中。

テロリストが参加者を人質に立て籠もって、警察と銃撃戦になったのは、どうでもいいことなのだ。

近衛には関係のないこと。

ところが、このオークションにかけられるはずだった品の中に、妖魔がいた。

騒ぎの中、この妖魔が暴れ出したとなつては警察も手に負えず、近衛に退治を依頼してきた。

近衛から派遣されたのは、偶然、司令部にいたイーリスと、ある失態を樟葉にこつてり叱られていた水瀬。

戦力としては、投入するのがもったいないほどだ。

だから、任務はあっさり終了する。

誰もがそう考えていたとしても、非難出来るはずもない。

「水瀬！行つたぞ！」

イーリスが無線機に怒鳴る。

二人が決めた手順は、イーリスがホテルの通路を逃げる妖魔をオークション会場へ誘導し、会場では水瀬が待ちかまえるという単純なもの。

すでに参加者とテロリストは妖魔に追われて警察の世話になっている。

会場はからっぽ。

「了解」

隅っこにおいてあった目の飛び出そうな値段の高級酒を始め、オークションにかけられるはずだった品の中からめばしいものを盗み

出していた水瀬が無線機に答える。

敵は「ゴースト・キャット」と呼ばれる猫型の妖魔。

普段は普通の猫のような愛らしい姿をしているが、いざとなると牛ほどもある巨大な幽霊となって人を襲う。

この幽霊に触れただけで人は動けなくなり、魂を吸い取られるという厄介な代物だ。

当然、銃弾や刀剣といった物理的な攻撃は一切通じない。

だから、水瀬達魔法騎士が派遣されたのだ。

グウオオオオッ！！

通路の向こうから背筋が寒くなるような雄叫びが聞こえる。

敵は近い。

会場内は結界の展開準備は終了している。

後は、敵を室内に誘導し、ドアを閉じてからゆっくり料理するだけ。

それだけだ。

水瀬は通路側ドアの脇に潜み、敵の登場を待つ。

（来た）

妖魔の気配。

間違いない。

風が流れ、室内に敵が入り込む。

黒い、巨大な猫の幽霊が広い会場の端まで走り、そこにあつたテーブルや椅子を蹴散らして停まる。

「水瀬」

イーリスの入室を確かめた水瀬は、そのままドアを閉めた。

これで封印が成立。

敵は室内から逃げ出すことは出来ない。

妖魔は、室内をうろついた後、会場の参加者が放り出していった

らしい品々が散乱する会場の真ん中に伏せた。

「じゃ、イーリスさん」

水瀬が霊刃を抜きながら言った。

「心臓を正確に、一撃で」

「任せるといいたいが……」

「？」

イーリスが躊躇する理由が、水瀬にはわからない。

「どうしたの？」

「あの腹の下、あれは何だ？」

「遺棄されたモノ？」

「そう願おうか」

イーリスは慎重に的を絞ると、ナイフと共に妖魔へ襲いかかった。

弾丸より速い神速の一撃。

妖魔がそれを避けることは出来なかった。

「司令部へ。敵は始末したが……」
血を流して倒れる妖魔の死骸を一瞥したイーリスが無線機へ告げた。

「爆発物処理班を急行させてくれ」

「爆発物？」

水瀬が不思議そうな声をあげた。

「見る」

イーリスが指さした先、そこにあつたのはアタッシュケースの残骸。

どうやら、ケースを開いた状態で放置されていたらしい。

「あれ？」

ケースの中は複雑な電子配線や四角い箱が入っている。

「これ、まさか——爆弾？」

「テロリストが用意していたんだろうな」

「なんか、カウンターが動いているけど」

それに気づいたのは、水瀬が最初。

カウンターの目盛りは50を切っていた。

「逃げよう」という水瀬だが、

「このままではオークション会場の証拠がなくなるぞ？」

イーリスは止めた。

「でもこれ、もう動かせないから窓から放り出すワケにも」

水瀬が爆弾の上を走る配線を調べながらそう呟く。

配線は6本。5本はダミーだろう。

「よく知っているな」

「座学で習った。見ればわかる。これ、振動でもドカンといく古いヤツだよ。だけど大きいなあ」

「ならきつとアメリカ製だな」

「そんなに作りが雑とも思えないよ？」

「これで回収騒ぎがおきてりゃ日本製だが……」

「爆弾に回収騒ぎって……でもね？大きいけどセンサーとかずいぶん精密にできてると思う。結構な独自性もあるし」

「精密で独自性か。じゃ違うな…台湾、それともインド製？」

「どっちにしても中国製じゃないと思う」

「うむ」

「えっと、コードは6本でうち1本が——」

「考えたって判らんだろ。右切れ、右。ちょっと考えたら6分の1が0になるだけだ」

「そうだね。間違っても一瞬だもん」

「そうだ」

「じゃ、切るね？」

水瀬が最も右にある配線にポケットから取り出したナイフの刃を

当てた。

「せえの——へ？」

水瀬が指に力をこめたその瞬間、イーリスの姿が消えた。
通路の奥、全力疾走で逃げていく影は——。

「い、イーリスさん？」

立ち上がった姿を探そうとした水瀬はナイフに力が入ったことに
気づかず、

プチッ。

一本の配線が切れた。

そして——

翌日早朝のニュースより

『昨日未明、都内〇〇ホテルで発生した爆発は、テロリストが用意していた爆発物が爆発したものとみられ』

新東京国際空港ロビー

「——で？」

「で、とは？」

「納得できません」

そう言つて目の前の相手を睨むのはイーリスだ。

「これは懲罰任務でしょう？何故、私だけが？」

「仕方ないだろう」

文句を言つたのは由忠だ。

「あのバカ息子は今停滞期に入つた」

「……ご都合ですね」

「息子の場合に限つて常に最悪のケースを想定しなくてはならん。
奴は必ずそのかなり斜め上をいくからな」

まるで親のセリフとは思えないことをさらつという由忠。

「で、お父上が代理で？」

「ん？——まあ、似たようなモノだ」

「わかりました」

相手は3つも階級が上の上官だ。

これ以上ゴネても損するだけだ。

イリスは敬礼した。

「同行させていただきます。閣下」

「よろしく頼む……それと、閣下はやめてくれ」

「はっ？」

「スマンが今回、俺達は夫婦だ」

由忠がイリスに手渡したのはパスポート。

近衛が偽造したもの。

無論、国家権力が発行したものだから、偽造という表現が正しいのかは悩むところだが。

「……」

パラッ。

写真は自分だ。

サインも。

だが、

「アナスタシア・ハヅキ——それが私の名前ですね？」

「そう。ラムリアース帝国の首都ライナス出身。貿易商だった両親は5年前に他界。2年前日本へ留学中に俺、つまり、葉月由忠と国際結婚。今は俺の営む不動産会社の秘書を兼ねている」

「——了解。それにしても」

イリスは怪訝そうな顔で由忠に言った。

「奥様、よく黙って送り出しましたね」

「人徳だ」

「また、何かもめて、今度は日本にいられなくなつたとか？」

イリスとしては冗談だった。

だが——

由忠は驚愕の表情で、

「誰から聞いた？」

「……」

二人が目指すのは東欧「ルーマニア王国」。

隣国をラムリアース帝国、ハンガリー王国、そしてアルメキア王国に囲まれる国。

民主化の名の元就任した宰相シャウクが国王を幽閉し、独裁者としてお定まりのことをした挙げ句、5年前に国王派のしかけたクーデターにより処刑されたことで世界の耳目を集めた国。

無論、それで平和になっただけではない。

急激な政治体制の変更は国内経済の混乱を招き、近年の世論調査では、国民の7割が「独裁政権下の方が生活が楽だった」と答え、同国政府を驚かせている。

また、経済の停滞は失業者の増加を招き、国民の生活は悪化、国民の不満が高まる中で、各地でストライキやデモが頻発し、治安の悪化を引き起こしている。

デモ参加者の中には、亡き宰相の肖像写真とともに、「宰相、戻ってきてください」といったプラカードを掲げる人も少なくないというのだから、惨殺されるほど嫌われた独裁者が、求められた国王ですら出来ない最低限度の生活を国民に保障していたことは明らかで、これが宰相を死後改めて評価させるという皮肉な展開となっている。

そんな所へ近衛が何の用がある？

イリスも、「ルーマニアへ飛んでくれ」といわれた時、内心で首を傾げたのは事実だ。

「……」

離陸して数時間。

モスクワ経由でルーマニアに入る機内でイーリスは横に座る由忠をちらと見た。

いつの間にか眠っていた。

パラッ。

どうにも飛行機に慣れず、眠ることも出来ないイーリスは、バツクの中から一冊のファイルを取り出し、ページを開く。

中に綴じられているのは一枚の写真。

そこに映し出されているのは、一人の女性。

特段、美人という程でもないが、十人前の器量。そんな女だ。

イーリスは、この写真を渡された時のことを思い出した。

「ターゲットはこの女よ」

写真を渡したのは樟葉だ。

「そう。ただし、外見に惑わされないで」

「？」

「詳細は現地の連絡員からとらせるわ。そっちの方が確実だから」

「閣下も、ご存じないのですか？」

「正しく言えば」

樟葉は少し迷ったように目を泳がせた後、

「絵としては掴めない。そういうべきね」

「それほどの人物なのですか？」

「人物、といえるのか。それすらわからない。時間がたてば、もしかしたらオトコになっているかもしれない」

「？変装、ですか？」

「変装……なのかしらね」

「閣下」

イーリスは写真を樟葉に戻した。

「命令は正確にお願いします。そのような曖昧すぎでは命令とは認めがたいです」

「しかたないのよ」

樟葉は頬をふくらませながら手元のモニターをイーリスの方へ向けた。

「何しろね？こいつが殺人事件を引き起こした時、50歳の男性、しかも警察官だったのよ」

モニタには顎の尖った神経質そうな男の顔写真と、犯行現場らしい写真が映し出されている。

場所は香港になっている。

「ところがね？この警察官が死体になって発見された」

画像が変わった。

同じ香港。今度はいかにもサラリーマンという感じの男の写真。

「警察官殺しの容疑者が、第一発見者であるこの男。それでね？」

画像が変わり、映し出される写真は女性。場所も今度はシンガポールになっている。

「こいつがシンガポールで殺されて、現場で目撃されたこのオナに容疑がかかった」

「——ちよつと待ってください」

イーリスが樟葉を止めた。

「連続殺人事件なら、我々近衛の任務とは相容れないものと」

「私もそう思ったわよ」

樟葉はマウスから手を離れた。

「ところがね？こいつが日本に来た。で、また殺された。現場は繁華街。目撃者は多数。第一発見者は事件から20日後に他殺体で発見された。……こいつがね？近衛が追っていた魔法薬のバイヤーだったのよ。それがきっかけ」

「バイヤーが？それこそ警察の」

「そう。実はこの件については問題があるの。というのは、近衛はこのバイヤーが死んでいたことに、バイヤーが死んだ後、数日間

気づかなかつたのよ。警察はそこそ騒いでいたんだけどね」

「何故、です？」

「バイヤーを追っていた魔導師の感知する生体追跡トレースが生きていたからよ」

生体追跡能力。トレース

生命体はそれぞれ独自の波長の霊波を発している。この霊波は指紋のようなもので、同一の波長は存在しない。この原理を応用して、その存在の居場所を突き止めるのが生体追跡トレースだ。

だからこそ、イーリスは怪訝な顔をした。

飛行機でいえば、レーダーに反応があるのに、実は墜落していたといわれたのと同じ、別な見方では、人が死んで、その死後に作られた品に同じ指紋が付着しているのが発見された。

そう言われているのと同じなのだ。

あり得た話ではない。

「何かの間違いでは？」

「バイヤーが魔法薬で近衛の網に引っかかった時、すでに前の殺人は起きていたことは調べがついている——ま、わかって当たり前だけどね」

「バイヤーの霊波が、必ずしもバイヤー本人のものとは限らない、そういうことですか？」

「そう。やっぱり少佐は打てば響くから助かるわ。あのバカ息子、そのホワイトボードに一生懸命情報書き込んでようやく理解したといったけど、怪しいものよ」

「魔族……いや、妖魔だと？」

「少佐」

樟葉は椅子の背もたれに体を預けながら言った。

「こういうことが出来る存在は、一つだけいるのよ。霊体ゴーストって呼んでる」

「霊体……ですか？」

「そう。体を持たず、ヤドカリみたいに人様の体を次々と乗っ取っていく。実際、生体追跡^{トレース}の結果、見つかったのがバイヤーじゃなくこの女。反応は同一よ」

「次々と宿主を変える霊体の存在なんて初耳です」

「近衛の魔導師くらいでないと知らないことよ。無理もないわ」

「？近衛は、何か情報を？」

「同じような事件が、実は25年ほど前、日本で起きているのよ。よかつたら調べてみて。“飯田橋連続殺人事件”資料室に行けば報告書あるから」

「そういたしますが……この日本でそんなことが？」

「そう。近衛の魔導師数名が殺害され、宮内省所有の呪具がいくつか盗まれた事件の犯人。もう迷宮入りしていたのよ」

「閣下は、これとその件は、つながっていると？」

「当時の生体追跡^{トレース}した魔導師がまだ現場にいてね。言い張っているのよ。同じだ。あいつがまた来た！ってね」

「成る程……それで、この女はルーマニアに向かったのですか？」

「現在の宿主である女性は小西美代子、32歳。ルポライターとしてことになっているけど、実際はいいトコすねかじりのイモリ（ニート）よ。そんなのがヤドカリだなんて笑うに笑えないわ。当然、こんなクズがお金になる仕事なんて出来るわけないからビジネスの線は消していい。でね？この女に追っ手をかけたのと、タッチの差でモスクワ經由ルーマニア行きの飛行機に乗ったことが確認されている。モスクワで押さえようって外務省経由で網を張ったけど、わかるでしょう？」

「ロシアの警官はそう優秀ではないので」

「日本の外務省の役人並み。そういうこと——他に質問は？」

「この女の渡航目的や立ち寄りそうな場所は？」

「ビザは観光。現地に知人はいないし、業者を利用しているワケでもない。親も知らないそうよ。ちなみに言葉も知らないはず」

「捜査には生体追跡能力のある魔導師が必要ですが」
「現地にすでに派遣して調査に当たってもらっている。それに従って行動して頂戴。何しろ、相手はすでに宿を変えてるかもしれないから——これで、命令が曖昧な理由がわかったかしら？」
「はい」

「ふうっ」

考えるだけで厄介だ。

霊体——。

恐らく、自分が死んだ時、一番近くににいる者に憑依してその体を乗っ取るんだろう。

顔写真なんて必ずしも役に立つものではない。

それだけに、今回の仕事は厄介だ。

言ってみれば、全ての敵を、他人の目で見てもらって、敵を指示してもらわねばならないし、何より、間違えれば同士討ちや無関係の者達をいくら犠牲にするかわかったものではない。

（それにしても）

イリスはちらりと横にいる由忠を見た。

（閣下は何故、水瀬の変わりを？）

単なる親バカ？

それとは限らないだろう。

甘いことは甘いが、仕事には厳しい人だ。

息子が停滞期というのは明らかに口実だ。

本当なら、「死んでもいいから行って来い！」位は言って、人員を増員させるはずだ。

それがない。

だから、イリスは思わずにはいられないのだ。

（何か、事情があるに違いない）

「眠れ」

突然、由忠から発せられた声に、イーリスはシートの上で軽く飛び跳ねたほど驚かされた。

「——何だ？そんなに驚いたか？」

由忠が目を開いた。

「てつきり、眠っているものと」

「添い寝が欲しいか？」

そつ。と近づく手を払いのけながらイーリスは言った。

「遥香様から言われています。任務をタテに何かしようとしたら閣下を殺しても良い。殺してからでいいから、とにかく自分に知らせろと」

「フン……そんな威しを恐れる俺か」

「こつとも言われています。“私が見抜けなかつたら大間違いですよ。”とも」

「お休み。良い夢を」

「はい」

イーリスもシートに体を預けて目を閉じた。

イーリスはこの飛行機というのがどうもキライだ。

何しろ時間がかかりすぎる。

その間がとにかく退屈なのだ。

何より、奇襲攻撃に弱い。

いいことなんて何一つない。

飛行機に乗る位なら、単独で飛んでいったほうがよっぽと楽だ。国境線の監視をくぐり抜ける方法はいくらでも知っているし。

もし、今回の任務が身分を隠した上で行動することが求められな

いのだったら、イーリスはためらうことなくそうしたろう。

実際、イーリスは飛行機に乗っている最中、ついに一睡も出来なかった。

その不快感に健気に耐えたイーリスがルーマニアの土を踏んだ時、すでに空には星が瞬いていた。

「……」

久しぶりに見る東欧の星。

ここから少し飛行すればあの生まれ故郷。

時間がとれたら、死んだ村人の墓参りにでも行かせてもらおう。

イーリスはそう考えながら、由忠と共に空港を出て、ホテルを指して歩く。

ホテルは市内のそこそこ高級そうな所。

問題は、車の出入りが制限されているため、大通りから道を一本、少し歩かねばならない程度。

「革命以降、随分治安も悪化したといわれていますが、この辺は安全ですよ」

そう言うのは、空港からここまで案内してくれた宮内省の若い事務官だ。

何でも、外国語研修の名目でここに派遣されているという。

彼の手には二人のトランクが握られている。

「そうか？」

言いつつ、由忠は足を止めた。

「何か、問題でも？」

事務官が由忠の顔を見つめるが、由忠はあらぬ方を見つめたまま、身じろぎ一つしない。

「？」

事務官も耳を澄ませてみる。

遠くで、何か悲鳴のような音が聞こえて来る。

「——犬、ですかね」

事務官は言った。

「ルーマニアは最近、野犬に手を焼いているんですよ。あちこちで人が襲われて」

遠くで何かが破裂した音がした。

「……」

「欧州の動物愛護団体が野犬狩りに抗議するせいでおおっぴらに出来ない。たしか、犠牲者は年間死人だけで数十人に」

「犬か」

「そうです、いえ、多分」

「——すまんが、ホテルに先に入って、荷物置いたら帰って良いぞ？ イーリス」

「はい」

由忠とイーリスは、音のする方へと走り出した。

「あつ、ちよつと閣下！？——もうっ。これだから騎士ってヤツは」

ぶつくさいいながら、事務官は荷物をホテルへ運び込みはじめた。

ハア……ハア……

足が痛い。

息が出来ないし体がバラバラになりそう。

でも、捕まったら酷い目にあわされる。

うっん。

殺されちゃう。

黙って部屋を出たヴィオーレはあの夜、見せしめだって、私達の前で棍棒で頭を潰されたんだもの。

一緒に逃げたヴィオリカやマルガリータだってもうどこにいるかわかんない。

さっきの悲鳴は、どっちかのだろう。

多分、殺されたんだ。

でも、私達は殺されたくない。
死にたくない。

ハア……ハア……

どんなことがあっても、私達は走り続けるんだ。

「待てこのクソが！」

バンツ！

耳元を何かがかすめた。

多分——ううん。絶対、鉄砲だ。

当たったら死んじゃう！

そんなもの向けないで！

私達は角を曲がって路地裏に飛び込む。

ゴミ箱の影に隠れて息を殺す。

ドカドカドカ！

激しい靴音がいくつも響いて走り去っていく。

「探せ！」

「大事な商品だぞ！？たく、手間かけやがって！」

「もう殺すなよ！？捕まえて二度とこんなこと出来ねえくらい痛めつける！」

「おうっ！」

……。

私達は神様にお祈りしながら彼らがどこかにいっちゃんのを待った。

お祈りが効いたのかな。靴音は遠ざかっていく。

やった！

私達はゴミ箱から出て路地を走る。

「いたぞ！」

えっ！？どこかにいつちやったんじゃないの！？

「このクソが！」

バンッ！

「っ！」

焼けた火掻き棒を押しつけられたような痛みが右腕に走った。

でも、私達は逃げるんだ。

どこへ？

こいつらのいないどこかへ――。

はぁ……はぁ……

後ろから何人も追いかけて来ている！

あの角を曲がろう！

そう思った時だ。

ポフッ

私達は誰かにぶつかって転びそうになった。

でも、なぜか私達は転ばなかった。

気がつくと、大きな手が、私達を抱き上げていた。

背の高い、男の人。

もしかしたら、ううん。絶対、あいつらの仲間だ！

もうダメだ！

そう思ったら、その男の人は優しい声で言った。

「どうしたんだ？こんな下着姿で、風邪ひくぞ？」

それは、私達が聞いたことがないほど優しい男の人の声。大きくて怖いだけのあいづらと違う声。

もしかしたら、助けてくれるかも。

そう思ったから、私は叫んだ。

「助けて！殺されるの！」

「殺される？」

男の人は、途端に厳しい目を細めて私達を見つめた。

でも、私達二人を一緒に抱きかかえるなんて、この人、力強いなあ。

「そ、そう！」

「誰に？」

「あ、あいづら！」

私が指さした先、そっちからあいづらが走ってきた。

「に、逃げて！」

でも、男の人は逃げない。

「イーリス」

私達をそつと石畳の上に降ろすと、後ろにいた女の人を呼んだ。

「保護しろ。負傷している」

「はっ」

しゃがんで私達に微笑むのは、ちょっと顔が怖いお姉さん。

でも微笑まれると何だか私達までほっとする、不思議な感じの人。そのお姉さんは、なぜか私達の目を塞いだ。

「おいコラ！」

現地の言葉で由忠を怒鳴ったのは、恐ろしくガラの悪い大柄な男だ。

他の連中も含めて、どう見てもマトモな仕事についていないのは確かだ。

「どうした？」

由忠の声は平然としたものだ。

「大の大人が雁首そろえて何をしている」

「うるせえ！さつさとそのガキ共よこしな！」

言うなり、男は銃を由忠に突きつけようとして、出来なかった。

ゴトッ

そう音を立てて石畳の上に転がったのは、銃を掴んだ男の腕。

「——ひっ！？ヒギヤアアアッ！！」

切断された己の腕と、そこから吹き出した血しぶきに、男はたまらず悲鳴を上げる。

「この子達の代金だ。受け取っておけ」

「てっ、テメエ！」

石畳の上でのたうち回る男の回りで、男達が一斉に銃を抜いた。

「死ねやコラ！」

ザンッ

それは一陣の風。

男達は、そう感じた。

そう感じた男達で、銃の引き金を引けた者はいない。

ズルッ

そんな音が辺りに響いたかと思うと、辺りは静寂に戻った。
石畳に転がるのは、上半身と下半身にキレイに切断された男達の
屍。

「どうにも斬った気がしないのは、どこの国でも同じか」

由忠は、霊刃をしまいながらボヤいた。

「試し切り用の骨付き肉に銃なんて持たせやがって——金の無
駄の極みだ」

由忠は、死体の中からめぼしい銃を数丁取り上げると懷にしまい
込んだ。

「裏ルートあたる時の金代わりになる——イーリス」

「はっ」

「二人を連れてホテルへ戻るぞ」

第一話 遭遇（後書き）

・実在した「ルーマニア王国」ではありません。架空の国です。ご注意ください。

第二話 「嘘と間違い」

「お、お客様？」

ホテルのフロントが奇妙な声を上げた。

「そ、その……お連れ様で？」

「ああ。娘だ」

由忠はそういうが、フロントが驚くのも無理はない。

由忠とイーリスは、コートにくるまった子供達を抱きかかえたまま、堂々とフロントでチェックインしようとしているのだ。

「お、お子さま……ですか？」

フロントはあからさまに不審顔だ。

子供だといつても、コートにくるまる子供達がハダカに近い姿なことは一目でわかる以上、フロントをこのまま放っておいたら、即座に警察へ通報するだろう。

「問題ありません」

フロントにそう告げたのはイーリスだ。

「私の娘です」

「あ、奥様？」

「そこで遊んでいて、川に落ちたの。何を疑いになっているの？ さつさと部屋の鍵を頂戴。この子達を着替えさせてお風呂に入れてあげたいのよ」

「はっ……」

「子供が風邪でもひいたら、ホテルとしてどう責任とってくれるの！？」

凄まじいまでのイーリスの気迫に押される形で、フロントは、蒼白な顔で何度も頷きながら言った。

「わ、わかりました。……鍵はこちらです。ようこそシギシヨアラ・ワグナーへ」

震える手で差し出された鍵を無言で受け取ったイーリスは、その

ままカウンターを離れようとして、ふと足を止めた。

「あなた？」

振り向くと、由忠と、由忠の抱えている子供が抱き合って震えていた。

「どういう意味ですか、それ！？」

「こ、怖かったよぉっ！！」

抱き合いながら泣き出す女の子達を前に、由忠はぼやく。

「子供があんな連中に追われたんだから無理も——」

「このオバさん怖いよぉ！」

「オバ！？」

カバンから服を取り出していたイーリスは、その言葉に過敏なまでに反応した。

「こ、このクソガキ。今、なんて？」

髪が逆立ち、放たれる殺気だけで室内が氷点下まで下がる。

「やめろイーリス！」

由忠が肩を掴むが、イーリスは子供達を絞め殺さんばかりの形相だ。

「その顔で何を言っても説得力がない」

「し、しかし……わたしはまだ30にもなっていない処女で」

「子供達からみれば、10代も20代も、みんなはるか年上だ。子育て経験があればわかることだ」

「私のプライドはズスタになりました」

「子育ての上で、誰もが味わうことだ」

「……おい」

もう泣き顔で抱き合う子供達を前に、イーリスはドスの効いた声で言った。

「私のことは“お姉さま”と呼べ——いいな？」

子供達は泣きべそをかきながら懸命に首をタテに振る。

「とにかくだ」

由忠が銃弾がかすった子供の腕をつかみ、治癒魔法をかける。

「……………」

「……………」

二人の目が驚きに見開かれた。

「魔法は初めてか？」

「えっ？」

二人は、顔を見合わせから激しく頷いた。

「そつ、そう！そうなの！」

「は、初めて！」

「ふん？そうか。まず風呂、次は飯だ。ルームサービス頼む間に、
イーリス。二人を風呂にいれる」

「……了解です。ついてこい」

「イーリス」

由忠の声が少しだけいらついた色を含む。

「子供に慣れておけ。いつ他の任務で相手にするかわからないんだぞ？」

「っ……………」

「言葉は上手く使え」

「わ、わかりました……………おい……………じゃない。とにかく！」

イーリスはどもりながら言った。

「ふ、風呂に入ろう。何もしない」

「……………」

「……………」

子供達は不安そうに互いの顔とイーリスの顔を見比べる。

「……………（怒）」

イーリスの額に青筋が立つ。

「二人とも」

ふわっ。という感じで子供達の頭に手をやるのは由忠だ。

「見た目は怖いお姉さんだが、いい子には悪さはしない——君達なら大丈夫だ」

キャー

キャー

「こらっ！きちんと髪を洗え！体が冷えるからきちんと湯につかれ！」

バスラブは大騒動。

それが、由忠がルームサービスと二人の追加宿泊をフロントに依頼した時の室内の様子だ。

明るい声が上がっている以上、どうやら子供達の緊張は解けたようだ。

うん。

いくら何でもハダカにつきあいで暴力を恐れはしないだろうという読みは当たったようだ。

由忠の頬が緩む。

——が、

「人の下着で遊ぶんじゃないっ！」

(む)

由忠は、一つ、重要なことを忘れていた。そう。

イーリスも風呂に入っているのだ。

考えてみれば、イーリスとはあの晩、とんだ御邪魔が入らなかったらきつとキメていたのに。

(今夜こそ挽回してやる)

その前に……。

由忠は、床を這うのかと思うほど態勢を低く、気配を消しながら、そっとバスに近づく。

ドアの向こう。

そこにはあの晩、お預けをくらったイーリスのあの(自主規制)な肢体が——。

ゴクツ。

唾を飲み込む音がやけに高い。

料理は五感で楽しむものだ。

ならば、まずは目で楽しませてもらう。

由忠はそう思った。

ドアの向こうではドタバタ音がしている。

このままなら、ドアを開けた音は気づかれないはずだ。

よし――

由忠がドアノブに手をかけた途端、

ガチャッ！

ガンッ！

由忠の瞼の裏で星が飛んだ。

「あれ？おじさん、どうしたの？」

子供達がドアの向こうできょとんとしていた。

「い、いや、通り過ぎようとして」

「ふうん？大丈夫？」

「な、なんとかな」

額をさすりながら由忠はすごすご部屋の奥へと戻った。

「いただきまあす！」

「ほらっ！ちゃんとお祈りしてからだ！」

「はあい！」

口は厳しいが、イーリスはなかなか、

（保母でもやらせれば上手くいくのではないか）
と思った。

風呂からあげ、自分のブラウスを寝間着代わりに着せつけたのは
イーリスだ。

もうその軍隊口調にも慣れたのだろう子供達も、怒られてもおび
えることはない。

ただ、イーリスの指示に従っただけだ。

よほど腹が減っていたのだろう。

遮二無二に食べることに熱中している。

「お腹、すいていたのか？」

「うんっ！」

口の中一杯に頬張りながら、子供達が微笑んで頷く。

「最後にご飯を食べたのは？」

「うんつと……一昨日の朝」

「そんなにか？」

思わず、由忠とイーリスが顔を見合わせた。

「うん……モグモグ……一昨日の昼にリリアがね？」

「うん」

「どこかに移動になるって時に暴れちゃって。それで私達、ご飯
抜きになったの。それっきり」

「移動？君達はどこにいたんだ？」

「孤児院よ」

「逃げ出したのか？」

イーリスがナプキンで子供達の顔についたソースをぬぐう。

「……あんなの、孤児院じゃないもん」

子供達の顔が、一瞬、曇った。

「子供を売り飛ばしたり、気に入らなければ殺したりするの。そ
んなの孤児院じゃないでしょう？」

「……売られたのか？」

「そう、だと思う。ううん。そうよ。絶対」

由忠もイーリスも愕然として二人を見た。

二人共、子供の人身売買組織の存在はさすがに知っていた。だが、その被害者に会うのはさすがに初めてだ。

まさか、本当にいるとは思わなかった。

「住んでいたのは、この近くか？」

「ううん。一日、トラックに乗せられていた。停まっている時間も長かったけど、どれくらい走ったかわかんない。私達も、どこかへ移されるはずだったのよ。あつ、一緒にいたのは私達とあと二人よ」

一人の子と重なるように、もう一人の子が言った。

「二人とも、殺されたと思うの。事故でトラックが倒れた時、ラクスはもう動かなかった。ヴィオリカは途中ではぐれちゃって、その後鉄砲の音がしたから」

「……そうか」

由忠は、深いため息と共に、腹の中に生まれた不快な感情をはき出した。

「閣下。警察へ」

イーリスは怒りをあらわにした目で由忠に言うが、

「いや、逆に危ない」

由忠はそれを止めた。

「しかし！」

「市街地で発砲があっても、警察が動いていない」

「……」

そういえばそうだ。

パトカーのサイレンの音一つしない。

何故だ？

拳銃の発射音は何度も聞いた。

死体は転がしたままだ。

それで何故、騒ぎが起きない？

「人身売買の組織と、警察が、何かつながっていると見ていいだろう。この子達が逃げ出したことを表沙汰にしたいということだ」

「では、我々も」

「ああ。下手に動けば俺達もこの国から生きては出られない。対処は急いだ方がよさそうだな――どうした？」

「あ、あの……」

「その……」

子供達は、食事の手を止め、テーブルに視線を落としていた。

「私達、どうなるの？」

「保護してやる。心配するな」

由忠はあっさりとそう言う。

「でも」

「信じられないのか？」

「……うん」

「どうして？君たちを追いかけてきた連中は撃退したし、ここでごうしてご飯を食べさせている。それでもかい？」

二人は、無言で頷いた。

「こら」

イリスがそれを咎めた。

「日本には一宿一飯の恩義という言葉があつてだな」

「……ワケを聞こう。それで君たちをどうするか決める。おや、

その前に」

ポンッ

由忠は、軽く手を打った。

それだけで、二人がビクツと体をすくませた。

「名前、なんていったつけ？」

「……」

それこそ聞かれない。

その時の二人の顔は、そんな顔だった。

「せめて名前くらいはいいだろう？」

「……」

「……」

結局、二人はエマ・リンカルとエリス・リンカルと名乗った。

よく似ているとは思ったが、双子なのだという。

ショートカットの子が長女のエマ。ロングヘアの子が妹のエリス。

白い肌に青い瞳、そして綺麗なブロンドをした可愛い、天使のような子供達。

だが、そう語るべき子供達の口から出てきたのは、天使のそれからかけ離れていた。

3つの時、革命によって両親は死亡し、祖父に育てられた。

その祖父が死に、二人は孤児院に送られた。

そこは教会が経営する孤児院。

二人とも、ここなら暮らせると信じたのだが……。

その孤児院がくせ者だった。

表の慈悲深い顔とは裏腹に、人身売買のブローカーと通じており、預かった孤児をブローカーへ密かに売り飛ばしていたのだ。

ここ数年、人身売買が問題になる時、国際的人権団体や国連人権委員会から常に名指しで非難される国、ルーマニア王国――。

革命以降の混乱の中で増える孤児達を商品にする組織が闇で暗躍する国。

そして売り飛ばされた子供は、臓器移植のドナー、研究機関の実験台、性的遊具、一言でまとめれば、道具として扱われ、そして殺

される。

この子達も、そうやって孤児院から売り飛ばされたのだ。

「そうか……」

由忠はワインがぬるくなるのも構わず、二人の子供を見つめた。

「安全は保証しよう。」

「……本当？」

「騎士の剣にかけて——それにしても、随分、信じられていないんだな」

「……ごめんなさい」

「そうだ」

イーリスは、胸元から口ザリオを取り出して子供達に言った。

「私はこれでもシスターだ。神に仕える身だから」

「……優しい言葉をかけてくれたのに、私を売り飛ばしたのも、シスターだよ？」

「——っ」

「ねえ、おじさん。お姉さん」

子供達は目の前の大人達に問いかけた。

「どうして大人はウソをつくの？」

「そ……それは違う」

少しの沈黙の後、そう言ったのは由忠だ。

「大人はウソつきなんかじゃない。色んな事を知った分だけ間違いやすくなっているだけだ。つまり、何も知らない子供より、ずっと間違いやすくなっているんだ」

「ウソをつくんじゃなくて、間違っているの？」

「そう。自分が正しいと思ってやってるだけ。でも、それは間違っていることだってあるんだ」

「正しいことが……間違っているの？」

「そういうこともある」

「ふうん……？」

納得出来ない様子の二人に、イーリスが言った。

「では、ここにいて、私達がウソをつくのか、間違っているのか、確かめてはどうだ？ それくらい時間はあるだろう？」

二人は、互いの顔を見合わせてから、小さく頷いた。

その夜、

ベッドでは二人が寝息を立てている。

その顔を見ながら、由忠とイーリスは、備え付けの小さな椅子に座り、グラスを重ねていた。

二人とも、無言のままだ。

由忠といえど、とてもではないが、この子供達を前に、妙な気は起こせない。

（よっぽど俺とイーリスは、肉体的な縁が薄いらしい）

由忠は、何となく、自分がかねめ以外の女連れでも何も言われなかった理由がわかった気がした。

「俺は」

何杯目かの後、ようやく由忠は口を開いた。

「俺はいろいろ悪事は働いたが……奴隷商人だけはやらなかった」

「女衞に近い存在かと思っていました」

「酷いな」

「近衛の男共には“武勇伝”なんて言われてるそうですけど……」

奥様がよく離婚を求めてこないものです。かねめ殿も、仕事以外であなたを信じていません。散々警告を聞かされました」

「かねめのヤツ。上官と師匠に対して」

「経験こそが最高の師匠です。他の近衛、宮内省の女性職員、恐らく全員、奥様に同情してますよ？きつと」

「夫婦だからな」

「意味がわかりません」

「イーリスはグラスを飲み干してから、

「立派な背信行為じゃないですか」

「妻への？そんなバカな」

「神に対する、です」

やや酒が入ったのだろう、イーリスは少しろれつの怪しくなった口調で言った。

「結婚を神の前で誓ったのでしょうか？私の伴侶はこの人だけだとそれなのに、あーっ！もうっ！男と女の貞操を神がきっちり固めてくだされば、世界はもつと平和になるのです！」

「神は子孫繁栄のため、枷を外してくれたのさ」

「……閣下の暴れ馬くらいは、はめておくべきです」

「馬……フツ。褒めるな」

「徹底的に貶してますっ！」

「声が大きいぞ。子供が起きる」

「すみません」

「だがな？考えて見るイーリス」

由忠は、イーリスのグラスに酒を注ぎながら言った。

「制約は時には重い。それを忘れさせてくれるものがあってもいいだろう」

「例えば？」

「こう……横をすれ違ういい女。ああ。あの胸。もみまくったらさぞ気持ちがいいだろう。あの引き締まったウエストとたつぷりのヒップ……やったらさぞ具合がいいだろうとか、そう想像するのが」

「犯罪です！」

イーリスは上官である由忠の口に指を突っ込んで引っ張った。

「なんて想像してるんですか？水瀬が可哀想です」

「む、息子なんか知るか」

由忠はなんとか口からイーリスの指を外した。

「あんな愚物。あの始末書量産装置のとばっちりで、俺が今年だけで何枚始末書書いて、何度減俸にされたかわかるか？このままだと年金に関わる」

「それでも、水瀬は、ご息は閣下を尊敬しています。口ではいろいろいいですけど、親を大切に思っているんですよ？」

「……ふん」

由忠は、そつぽを向くなり、自分のグラスに酒を注いだ。

「そう照れないでください」

「誰がだ」

そう言っただけ傾けるグラスの回数が不自然に多い。

向こうも不器用だが、それ以上にこの人は不器用だ。

イーリスは吹き出しそうになりながら、それでもマジメな顔で言った。

「その尊敬する大切な父上があつちで女を作って、こつちでモメてなんて職場で聞かされる水瀬の立場も」

「俺のオヤジはもつとハデだったぞ？」

「それを嫌いませんでした？」

「いや？絶対あれを越えてやろう。オヤジより一人でも多くのオンナをモノにと——どうした？」

「なんでもありません。ちよつと頭痛がただけです」

「そうか？とにかく、色の道は水瀬家の男の伝統だ。それが出来なければあいつは俺の子ではない」

「あれは無理でしょう」

「いや？」

由忠はあつさりと答えた。

「あいつは14で女を孕ませた。俺もあそこまではやらなかった。うん。あいつはそれだけは俺を越えた」

「そんなうれしそうな顔しないでください！普通、親なら青くな

る所です！」

「だから声が大きい……何。そうやって大人になるのだ」

「で？そのお孫さんは？」

「流産した。……そうしておいてくれ」

「ひっかかりますね」

「俺はあいつとは違う。あいつは一人の女で満足するタイプだが、俺は恋愛という海を泳ぐ回遊魚だ。常に前進しないと死んでしまう」

「回遊魚が何故伴侶を？」

「あれは網だ。遥香という網にひっかかったわけだ」

「自ら望んで網にかかったのです。それ以上は大人しくしていただきますい——奥様ならきつとそう言うでしょうね」

「網を網と思わず世界をまたにかけるさ——それに、亭主をサケと例えるなら「外の女」とは母なる川のようなものだ。世界の根本にかかわる真理だぞ？だから、あいつもわかってくれるさ」

「刺されてから後悔しないでくださいね？」

「刺される程度ならまだ加減してくれたってことだな」

「……話題を変えます」

「つまらんな」

「こっちは発狂しそうです。——あの子達、どうするんです？」

「エリスと、エマか？」

「エマとエリスです」

「え？こっちのショートカットがエリスじゃないのか？」

「違いますよ。エマです」

「……」

じつと二人を見つめた由忠が真顔でエーリスに訊ねた。

「どうしてわかるんだ？」

あきれ顔のエーリスは即答した。

「どうしてわからないのですか？」

「まあ——いい」

「明日の朝までに覚えてくださいね？可哀想です」

「善処しよう。明日、近衛にこいつらのパスポートを作らせる」

「パスポート？」

「そうだ。日本国籍、その他、この子達が日本人として保護の権利を受けるためのあらゆるデータを偽造させる。明日以降、恐らく警察も動くぞ」

「保護すると？」

「ああ。少し、気になることがあるのでな」

「この子達が？」

「この子達を追う組織、そしてリンカル。その名が……気になる」

由忠は、グラスを机に置くと、黙って子供達の寝顔を見つめ続けた。

第三話 「組織」

由忠がいつ寝たのかはよくわからない。

ただ、目が覚めると、子供達が不思議そうな顔をして由忠の顔をのぞき込んでいた。

「おじさん、どうしたの？」

「なんで床で寝ているの？」

「なんだかバツの悪いものを感じる。」

「……いろいろあつてな」

「ニホンジンって、床で寝るって本当なの？」

「ほう？物知りだな」

起きあがった由忠が二人の頭を撫でてやる。

「へーっ！」

「そうなんだあ！」

子供達は無邪気に笑うが、

何のことはない。

由忠が床で寝ている理由、それは、昨日「川の字になって寝るか」といったら、エリスから「一本多いです」と答えられ、そして床で寝るといわれたのだ。

「まさか女に床で寝ると？」

その勝ち誇った目に追われるように、由忠は床に寝転がった。そういうわけだ。

「あれ？おじさん」

それに気づいたのはエリスが先だ。

「このお人形、何？」

エリスがつつくのは、机に置かれた由忠の携帯電話のストラップについた、タスキがけの豆腐のバケモノのような2体の人形。

由忠が桜田門の愛人からもらったものだ。

「ああ。これか？これは日本の警察のマスコットキャラ“タイホくん”だ」

“タイホくん”？」

エマが興味深そうにのぞき込む。

「どういう意味？」

「逮捕の意味だ。まあ、警察だからな」

「ふうん。どんな子なの？」

「日本で一番逮捕が上手い。好きな言葉は“天下り”“裏金”“迷宮入り”、キライなのは“謝罪”“弁明”“人権”」

「こら」

由忠の脳天へ垂直チョップを喰らわしたのはイーリスだ。

「黙って聞いていれば何を嘘八百」

「違うの？」

「違う。これは“パーポくん”だ」

「やっぱり、大人は間違えるんだねえ」

うん。と二人は驚きの顔で頷きあった。

「イーリス……」

「自業自得です。大体、なんですかその“タイホくん”って」

「一般公募の最後まで残った中の一つだそうだ。俺は“フショウジくん”で送ってみたが落選した」

「当たり前でしょう？そんな名前はむしろ近衛の方がお似合いです」

「おじさん！」

二人が携帯を持ちながら由忠に言った。

「これ頂戴？」

「ストラップか？まあ、いいだろう」

由忠は、携帯からストラップを外すと、二人に手渡した。

「大切にしろよ？」

「はあい！」

「ありがとう、おじさん！」

「おやおや。娘に喜ばれた御父様は顔がにやけております」

イーリスが茶化す。

「御父様？」子供達がその言葉にきよとした顔をする。

「そうだ」

イーリスが真顔で言った。

「これから我々は家族として行動する。頼りないだろうが、この人が君たちの父親。ヨシタダ・ハヅキ」

「――で、この瞬間湯沸かし器なお方が、イデッ――！」

由忠の後頭部にイーリスの蹴りが見事に決まった。

「私はアナスタシア・ハヅキ。夫婦だ。お前等も姓はハヅキ、ラムリアース帝国出身の私と日本人の夫の元に生まれた娘達だ。従って日本人だと名乗れ」

「お姉さま。どう思う？」

「きつとっそつこだよ。でも、私達もうそつこの親子なんだから、いいよね？」

「じゃ、御父様と御母様」

「そう。御母様が怒ったら、大声で“じどうぎゃくたい”って呪文を唱えればいいのよね？そしたら警察がきてくれるんでしょう？」

「そう！」

「じゃ、問題ないわよね」

「ねーっ」

「……」

この二人の母親役をこなす自信を一瞬にして喪失したイーリスは、呆然としながら二人の娘を見つめるだけだった。

朝食後、二人の服を買いに出たイーリスが戻ってきた。

「サイズがわからない」という理由で、結局、イーリスは昼食を兼ねて二人と共に買い物に出かけることにした。

確かに、由忠の目から見ても二人の服はダブダブだった。

「目立たないようにな。いいか？3時間後にレストランで落ち合

うんだ」

「はい。それと、この子達のパスポートは？」

「写真を確保しろ。大使館に手を回して、写真を貼り付けられたいように手配してある。今日の夕方までには到着する。それまでモメゴトになるな」

「了解」

ホテルを出た由忠は、その足で大使館に近衛の事務官を訪ね、手配の確認を行うと共に、近衛から届いた命令書に目を通した。

命令書を読む限り、事態は思ったより厄介な様相を呈していた。

「君」

お茶を持ってきた事務官に由忠は尋ねた。

「あつ。自分は岡田義男一等事務官であります」

「岡田事務官。この内容は承知しているか？」

「いえ。自分が受けた命令は、閣下達のルーマニアにおける行動の支援のみです」

「ふむ……それで？魔導師達のアパートへはどうやって？」

「地図を用意いたします」

「同行してくれないのか？」

「申し訳ございません。パスポートその他の手配が手間取っております。あつ、でも、ご命令通り、本日夕方までには」

「そうか……頼むぞ」

「いいか？」

イリスは、帽子を目深に被らせた二人にきつい口調で言う。

「これはすごく危険なことだ」

「うん」

「はあい」

「ここで、あいつらにみつかったらどういうことになるか」

「あつ！ソフトクリーム！」

「ホットドッグがいい！」

二人は勝手に明後日の方角へ走り出していく。

その姿を呆然として見つめながら、イーリスは拳を振るわせた。

「こ、この——」

1分後。

「自分達の立場がわかっていいのか!？」

耳を掴んで引っ張られていく二人。

「痛いよお！」

「わーんっ！」

だが、誰からも文句はこない。

どう見ても若い母親が娘を叱っているようにしかみえないのだ。

「エマ、エリス！言うこと聞かないなら、あの連中に突き出すぞ！？」

「やだあ！」（×2）

二人は泣きべそかきながらイーリスに謝る。

「もうしません！約束守ります！」

「なら少しは大人しく——」

「？」

イーリス達の前に立ちふさがったのは、まさに“あの連中”だった。

「よお姉ちゃん」

イーリス達を取り囲むように立ちはだかるのは、昨夜見たあの連中のお仲間と見て間違いないだろう。

「……なんだ」

「そいつらに用があるんだよ。どいてくんない」

労働者風のひげ面がドスの効いた声でイーリスに言った。

子供達はすぐにイーリスの背後に回った。

「娘に用だと？」

「娘？……へっ！こいつらのお袋はとうの昔に殺されちまったよ。下手なお情けは命取りだぜ？」

「下手な因縁つけるな。ペドか？」

「おおよペドもペド！金になる子供は大好きときてらあ」

「そのペドが何と言った？この子の母親は殺されただと？」

「そうよ。こいつらは知らねえだろうがなあ」

「子供の前でほざくな。教育上悪い」

「何い？」

「——話を聞こう。人目につかないところはないか？」

「へっ。ここでもいいんだぜ？警察も住民も、俺達に関わるうな
んてバカな考えはもってねえ」

「いい街だ」

「だろっ？」

「だが、私は露出狂の趣味はないのだ」

「——へっ！そういうことかい。いいぜ？ついてきな」
品のない笑い声に囲まれながら、イーリス達は歩き出した。

「ここか」

地図片手にようやく見つけた古ぼけたアパートの一室。

ヨーロッパは建物が古くても中身が最新鋭ということもザラにあるため、由忠も外見だけで中身を判断できない。

ブーッ

ルームナンバーを確かめ、呼び鈴を鳴らすが、反応がない。
腕時計で確かめたが、接触予定時間だ。

ブーッ

ブーツ

何度、呼び鈴を鳴らしても反応がない。

「……」

由忠は、手袋を確かめるとドアノブに手をかけた。

カチャ

鍵は、かかっていない。

近衛の関係者がありえない不用心さだ。

「これは？……まさか」

霊刃を抜き、あたりを確かめた由忠はアパートの中へと忍び込んだ。

「——で？」

イーリス達が連れ込まれたのは、崩壊寸前のボロアパートの空き部屋。

恐らく、ここでさらってきた女をなぶり者にするなり、殺しをするなりしていたのだろう。

女が体を代償に命乞いをすると思った男達は、その床に倒れ伏していた。

息のある者はほとんどいない。

今、イーリスが机の上で押さえつけているのは、先程の男だ。

「た……助けてくれ……俺は命じられただけなんだ」

「よくあるセリフだ」

ベキッ

「ぎっ！」

奇妙な音がして、男が悲鳴を上げた。

「質問に答える。そうすれば楽にしてやる」

「わ、わかったよ……ゆ、指を折らないでくれ」

「安心しろ。次はもつと凄まじいぞ？」

「わかった！わかったよ！」

「では聞く。まず、誰に頼まれた？」

「ほう？似合うな」

はにかむ二人の子供達へ由忠はそう言った。

「えへへっ」

「似合う？」

フリルふりふりリボンゴテゴテのドレスに身を包む子供達はうれしそうにくるりと回ってみせる。

「ああ。かわいいぞ」

由忠は目を細めて頷いた。

「さ、ご飯にしよう」

「はあい！」（×2）

「しかしイーリス」

「は？」

「こんな趣味があるとはな」

「私の趣味ではありません」

イーリスは慥然として言った。

「シンプルな服を探していたのですが、この子達はこっちの方がいいのかなんとか」

「成る程？」

「私が子供自分、こんな服なんて見たことすらありませんでした」

「ま、時代だな」

「まるで人形です」

「二人は気に入ったんだろう？」

「見ての通りです」

テーブルに並べられた食事をおいしそうに食べる二人。

「こら！」

「あつ。御母様ごめんなさい」

「お祈りお祈り」

「そうだ」

「ふん。イーリスも母親が板についてきたな」

「先程、男共に囲われました」

「もう来たか。どうした」

「この子達は気絶させた上です。問題はありますが、これとはんでもないことになりそうです」

「ん？」

「詳細はまたホテルで。ただ、この子達を狙っている組織だけでも。“血姫”です」

「血姫？知っているのか？」

「オカルト組織、または魔法研究組織とでもいいましょうか。魔法技術で肉体改造を行うことに関しては裏世界でもトップクラスの組織。東欧を代表する犯罪組織とも言えます」

「肉体改造……裏でそうなら表でもそうだろう。非合法か？」

「魔法での肉体改造は全て非合法でしょう。軍事、暗殺、様々な組織が、彼らの産み出した“製品”もしくは“研究成果”を買い求めます。また、彼らもそれを使って敵対するあらゆるモノを排除、または傘下に……なにより」

「何より？」

「噂ですが、トップを始め、幹部は吸血鬼と」

「出来過ぎだ」

「そう思いたいのですが、経験上、むしろ噂を信じます。薬物、洗脳、そして魔法。あらゆる方法で吸血鬼化させているのではないのでしょうか。となると、この子達も」

「間違いなく、そういうことだな。子供の方が柔軟性があるから改造には適している」

「……それと、この子達の母親の名前だけはわかりました」
「ほう?」

「エリーナ・イオネスコというそうです。この人物については近衛を通じて調べさせ」

「待て」

由忠はイーリスを制した。

「それは、まだ調べなくていい。いや、こっちで調べよう」

「閣下?」

「……」

イーリスは怪訝そうな顔で由忠を見た。

由忠の顔は何かを思い詰めている。その名を知っていることは明らかだ。

「コホン。それより」

由忠は咳払いをしてから話題を変えた。

「こっちもまずいことになった」

「まずいこと?」

「魔導師が殺された」

第四話 「消えた死体」

「殺された？」

突然の言葉に、イーリスは驚きを隠さない顔で由忠を見た。

「そうだ。魔導師達のアパートの部屋は血風呂ブラッド・バスになっていたよ」

「一体、誰が？」

口の回りをソースでベタベタにした子供達の顔を拭いてやりながら、イーリスは訊ねた。

「近衛に敵対する者と見てよいのでしょうか」

「断定は早計だがな」

ワインのグラスを傾けながら、由忠は答えた。

「魔導師が追っていたのは人間ではない。それに、生体追跡トレースは、そう簡単に逆探知出来る代物ではない」

「すると、何故？」

「偶発的な事件の可能性も捨てきれない。さっき、アパートの側を通ったら警察がいた。大使館を通じて、情報が得られるかもしれない」

「それまでは、動きようがないですね」

「ああ。何より」

「？」

「向こうが近衛に敵対するなら、向こうから来てくれるだろうし」

「向こうから？」

イーリスがきょとんとした顔で由忠を見た。

「どうしてです？」

「もし敵が、魔導師達を魔導師として殺したならの話だが」

「……どうぞ」

「敵は自分達に仇をなす存在をかぎつける鼻を持っている。でなければ、魔導師達の居場所を知りようはない。いいか？魔導師達の存在と任務を知る者はごく限られている。大使館だってそうだ」

「この国で残されているのは」

「そうだ」

由忠はニヤリと笑った。

「俺達だけだ」

その後、再びイギリス達と別れた由忠は再び大使館へ入った。

丁度、岡田がデスクにいてくれたので声をかけた。

「あれ？閣下」

「書記官。変わったことは？」

「変わったこと？」

岡田はきょとんとして由忠の顔を見た。

「国内で日本人が絡む事件とか」

「いえ？」

岡田はそう答えた。

「あ、パスポート、出来ましたよ？」

由忠は、子供達のパスポートを受け取りながら怪訝そうな顔で言った。

「何も？いや、そんなハズはないだろう」

「ははっ。ヤダなあ。閣下。この国に今、日本人が何人いるかご存じですか？」

「……いや？」

「永住を含めた長期在留邦人はたった10人、旅行者だつてわずから50人足らずですよ？何かあれば大使館は久々の事件つて大騒ぎです。この前、旅行者がカバン盗まれた時なんてそりゃ大使館の様子を見せたいくらいでした。ルーマニア側が日本が戦争を始めるつて青くなつて位。……まあ、職員はそれ位、お祭りに飢えているんです。ですから、大使館が静かなら、何もないつて見て下さい」

「合計で60人程度。そんなに少ないのか？」

「正規入国者だけです。他国から入る者も若干はいるでしょうが

限られますね。この国に好んで来る物好きは少ないですよ」

岡田は笑いながら、作りつけのカウンターに置かれたファイルを取り上げて由忠に渡した。

「在留邦人情報」というテプラが貼り付けられている。

「永住者は全員身元がはっきりしてますし、犯罪歴もありません。老後をここでのおんびりすごそうという年寄りや女ばかりです。また、正規に入国手続きを踏んだ旅行者も、一昨日のバックツアーの参加者と個人が10名程度です」

「……」

ファイルにはこの国にいる日本人の顔写真入りのデータが挟まれていた。

「成る程？この国は日本とはそんなに縁がないのか」

「今は、です」

岡田は言った。

「元々、ルーマニアと日本の皇室は共に君主制。先々代のカロル三世の時代は経済、外交、文化、そりゃ活発な交流があったそうです。ただ、先代のハイミ2世治世下の暗黒時代から内戦と政情不安が続いて、今はもうすっかり。ほとんど国交断絶に近い状態です。この大使館だって、君主制国家にはすべからく大使館を置くという外務省の建前というか、慣例にならつてのものです」

「ふうん？では書記官」

「はい？」

「今日、本当に日本人が絡む事件は起きていないのかな？」

「ええ。そんな騒ぎは……あれ？」

岡田は少し考えてから、思い出したように言った。

「そういえば」

「ん？」

「永住者の一人のアパートでイタズラ騒ぎがありましたね」

「イタズラ？」

「ええ。誰かが忍び込んで床にペンキをばらまいたとか」

「ペンキだと？」

「はい。それでさっきまで大使館員が警察に呼び出されたんです」「ペンキをまかれたヤツ、生きているのか？」

「え？当然です。通報したのはその人です。何でも外出して戻って来たら、床一面ペンキだらけになっていたとか」

「そいつの身元は？」

「え？えっと」

岡田はファイルの中から一つのページを由忠に見せた。

「この人です」

「広井一正……65歳。独身？」

魔導師ではない。

魔導師は50歳の男性。それに永住者だとは聞いていない。

アパートで見た死体にもこの顔はなかった。

「大使館員も現場を見せられたといえます。室内ペンキ臭くてたまらなかったとか」

「この広井という男、今どこに？」

「ついさっき、大使館の誰かと一緒に隣国のラムリアースへ」

「出国を許可したのか？」

「そりや無理ありませんよ。目的は半分公務ですから」

岡田はページの一角、その経歴を指さした。

「外務省元ルーマニア大使？」

「そうです。日本で最もルーマニア通の人といえるでしょう。ルーマニアに関する本も何冊も出しています。つまり」

岡田は由忠に言った。

「ここ大使館は、彼にとって元職場。今の職員はかつての部下であり教え子。誰も逆らえはしません」

「……そうか」

「あ、それと」

ファイルを閉じた岡田が言った。

「広井さんのアパート、明日には業者が来て、床を張り替えるそ

うです」

大使館を出た由忠は、アパートの近くのバーで夜を待った。

安いレコードから金切り音に近いヴァイオリンの音が流れる薄暗い店内にいるのは、由忠とマスターだけ。

時間が早いのか、客足がない。

「へえ？あんた東洋人かい」

ギムレットをカウンターに置いたマスターが驚いた声をあげた。

「ハーフに近い」

「見えないな」

「よく言われるさ。逆に向こうじゃ目立つ」

「だろうなあ」

「この辺じゃ、東洋人は珍しいだろう？」

「いや？あそこのさ」

マスターがドアの方角、その向こうにはあのアパートがある、の方角を指さした。

「あのアパートに日本人が住んでいる。昔の大使だったって話だ」

「この店へは？」

「よく来るよ。ヒロイというヤツさ。俺達はタイシと呼んでるけどな。知っているかい？日本の言葉で大使の意味だそうだ。実際、ルーマニア大使だったヤツさ。で、タイシは去年、奥さんが亡くなってからはよくメシを食べに来てくれる。金払いはしっかりしてるし、いい客だぜ？」

「一人暮らしか？」

「ああ……いや？違うな」

「ん？」

「最近、仲間が増えたらしいな。大使の知り合いとか説明を受けたよ」

「何人くらい？」

「3人くらいかな？夜になると酒を飲みに来てくれる。ヘンに騒がないし、礼儀正しい奴らだが……何しろ暗くてなあ。みんなあのテーブルで飲むんだが、まるで葬式みたいな辛気くささでよお。金は払ってくれるとはいえ、勘弁してほしいぜ」

「ほう……そんなヤツ等かい」

「ああ。そういえば、一昨日くらいから見ないなあ」

「いい金ヅルってわけだ」

「そういうことさ。もう一杯、どうだい？うちのパリンカは混ぜ物のない純粹さが売りさ」

「ほう？もらおうか」

由忠はその後、3時間居座って酒を飲み続けた。

「あんた強いねえ！」

マスターが感心というよりむしろ感動したという声で由忠を送り出した。

ちなみに、パリンカはアプリコットから作る蒸留酒。度数は50度に近い代物、もう可燃物扱い出来る代物だ。

それをストレートで何杯も飲み干した由忠には、全く乱れた所がないのだからマスターでなくとも驚くだろう。

「また来なよ。ダンナ。一杯くらいおごりにしてやらあ！」

「おう」

片手をあげてバーを出た由忠は、そのまま素知らぬ顔をして道を歩くフリをした。

フリ？

そう。フリだ。

歩く前にタバコに火をつけようとしている。

端からはそうとしか見えない。

そういう仕草をとりながら、由忠はそっとバーに入る階段の影に隠れた。

その視線はアパートに向いている。
アパートの玄関。

街頭も照明もないそこには人の影が浮かんでいる。
ほっそりとした影がドアで何をしているのか？
間違いなく、ドアに細工をしているのはわかる。

わからないのは、その影がアパートに何の用があるかだ。
泥棒？

それが一番近いかもしれない。
（捕まえればわかるか）

由忠はそう思った。

もし、殺しても相手は犯罪者。何とでも言い訳は成立する。
音は聞こえないが、影が立ち上がり、そしてドアが開いた。
どうやら、ドアの鍵を開けるのに成功したという所だろう。
ドアノブに挑んでから1分と経っていない。

（いい腕だ）

由忠は内心、そう思った。

影は、周囲を警戒しながらドアの向こうへと姿を消した。
由忠がその後を追う。

室内はまだペンキのニオイが染みついているらしく、シンナーの
ニオイが鼻をつく。

玄関を入ってすぐにリビング。

由忠が死体を見た場所だ。

あの時、由忠は確かに見たのだ。

それは男性3名の死体。

全員が刃物で斬り殺され、室内は血まみれ。
持っていた近衛府発行のIDカードと顔が一致したから間違いな
い。

近衛から派遣されてきた魔導師だ。

岡田から見せてもらったファイルにも載っていた顔達。
それがよりにもよって元大使のアパートで死体になって転がって
たことになる。

そして、証拠は隠滅された。
血の臭いをペンキで誤魔化したのは明らかだし、死体は処分した
と考えていい。

だが、
由忠はそこにひっかかった。

どうやって？

三人分の死体だぞ？

ゴミとして外へ出すにしても目立ちすぎる。

何より、自分が死体を見てから警察が来るまでの時間は恐らく2
時間とあるまい。

方法がわからない。

何のために？

死体がそこにあつては困るのか？

その理由は？

理由もわからない。

誰が？

大使が絡んでいるのか？

まさか。

大使は間違いなく近衛から依頼され、場所を提供していたはずだ。
それに、大使自身、近衛を敵に回してこの地上で生きていられる
はずがないことはわかっているはず。

では、誰が？

誰がやったかもわからない。

全てが謎だらけだ。

全てが由忠の意表をついていた。

魔導師と合流しろと指示を受けた場所は元大使のアパート。

消えた死体。

……

考えるだけでわけがわからなくなる。

ヒントになるのは一つだけ。

死体を発見した時には感じなかった

（魔素の反応がある）

ことだけだ。

たったそれだけ。

手がかりというにはあまりに細い糸。

見えたと思つた敵の姿が、由忠の脳裏の中で次第にぼやけていく。

「とりあえず……」

気配を殺した由忠は、すぐに影の居場所を知った。

アパート二階からゴソゴソ音がする。

（やっぱり、コソ泥か）

そう思つた由忠は、ため息混じり二階へ上がった。

二階の一室のドアが開いていた。

下手にドアを閉めることで逃走経路が塞がれることを恐れているのだろう。

室内の奥、チェストの中を漁っている影があつた。

「？」

まだ影は自分に気づいていないが、由忠はその姿に奇異なものを

覚えた。

細い体

華奢なボディライン。

間違いなく、女だ。

しかもこそ泥にしては、一目でブランドモノとわかるような、いい服を着ている。

チエストの中を調べ終えたのだろう。

こそ泥は立ち上がると、舌打ちして辺りを見回しつつ口を開いた。

「おつかしいわねえ……」

「!？」

由忠は我が耳を疑った。

出会った女の声は忘れない。

ある意味驚異的な記憶力と褒めることも出来るが、とにかく由忠は、その女の声を以前に聞いたことがある。

殺人犯に暗殺者にヤクザのイロまで、いろんな犯罪を犯した女に出会ってきた由忠だけに、その量はあまりに膨大過ぎた。

おかげで由忠は、その声の持ち主が誰だか思い出せない。

(トシつてわけでもないといいたい……)

心のどこかで、そうだ。と認めざるを得ない。

一方、問題の声の持ち主は、

「ったく、どこに隠してるのよお」

机の引き出しを漁り始めた。

由忠はそつとその背後に立つ。

こそ泥はそれでもなお、由忠の気配に気づかない。悠々と鍵あけに挑戦し、そして成功した。

「ったく、こんな鍵ちよろいわよねえ」

パカンッ!!

「痛っ!？」

由忠の拳がこそ泥の後頭部を直撃した。

「な、何！？——えっ！？」

後頭部をさすりながら振り返ったこそ泥は、そこに立つ由忠の姿を認め、慌てて態勢を整えた。

「こ、この私の後ろをとるとは……やるわね」

「何とでもいえ。このこそ泥」

「あれ？」

女も、由忠の顔に覚えがあるらしい。

「あんた……どこかで」

じつ。と由忠の顔を見た女の顔が、途端に険しくなる。

「あつ、あんた！」

どうやら、相手が思いだした。

そう思った由忠は、随分わざとらしい声で言った。

「おや、どこかでお目にかかったお顔が。どなたでしたかな？」

「以前、あなたにお世話になった女です……そういわれたいの？」
言われた方は、絶対に思い出したくない過去と直面させられたという顔でそう答え、その言葉で由忠は相手を思いだした。

「はて？ こんないい女をお世話した覚えはございませんが？」

「ございませんが！？ この薄情者！」

「冗談だ。——こんな所で何をしてる？」

「ビジネスよ。あんたこそ何してんのよ、こんなところで」

「お前の夢を見ていた」

「……嘘くさ。最低」

「最低で結構毛だらけだ」

「猫灰だらけ。それにつけてはいさようなら
クルッ。」

踵を返して室内から出ようとするこそ泥の肩を掴んだのは由忠だ。

「もう一度聞く。忍しのびが何をしているんだ？ 由衣」

「……呼び捨てにしないで」

不愉快そうな声で掴まれた肩を睨み付けるのは、由衣。

瀬戸由衣。せと・ゆい

倉橋忍軍頭領の娘だった。

第五話 「姫様の悩み」

「もう一度聞く。何をしている？」

「その前にエロい手離せよオヤジ」

「……脳みそからダイレクトに聞いた方が良さそうだな」

「くっ」

由衣は唇をかみしめた。

相手が誰かわかっている。

自分が絶対になわなないバケモノだ。

だが、それでもあの屈辱だけは忘れることは出来ない。

「あんたこそ、何してんのよ」

そういつてのけるのが精一杯だ。

タン力は切ったが、自分の寿命を縮めるだけなことは認めざるを得ない。

「仕事だ」

「私も仕事よ」

「倉橋はこんな東欧までこそ泥しに来るのか？」

「失礼なことじゃないで」

由衣は肩を掴む由忠の手をはねのけた。

「きちんとした仕事よ」

「誰の」

「忍びが依頼主の名前を明らかにすると思うの？——お頭？」

「やっぱり、脳みそいじらせろ」

「い・や」

「……」

「……」

「じゃ、体に聞く」

「どうしてそういう方面にしか発想がいかないの！？あんたって！」

とつさに胸の辺りをガードしながら、由衣はやや青くなりながら叫んだ。

「あんた、前世は種馬だったんじゃない!？」

「ふん……この所、皆が俺をそう評価するな」

「当然よ!」

「馬並み……か」

「晴れ晴れした顔でセクハラ発現するな!この人格破綻者!」

「なら一晩俺とつきあえ。俺がどれほどの人格者か体がわかってくれる」

「心にわからせようとはしないの?」

「体がそうなら、心はそれを自然と認めるようになる」

「……ごめん。言い間違えた」
ぱんつ。

由衣は両手をあわせて由忠を拝む仕草をしてから言った。

「破綻してるのは人格“だけ”じゃないね。このオールラウンド破綻者」

「……仕舞いにや殴るぞ?」

「女に手を挙げるつもり?——へえ?」
ずいつ。

由衣は勝ち誇った顔で由忠に顔を近づけた。

「殴っていいわよ?」

「……」

「殴るんでしょう?女を」

「……」

強張った顔で睨み付け、拳を振るわせる由忠は、それ以上の行動には出ない。

「ふふつ……どうしたの?」

「……ちっ」

舌打ちをして視線を外したのは由忠だ。

「ぷつ。あんた、結構イイ奴だよ」

由衣は笑いながら言った。

「女に手を挙げないタイプだって、見ればわかるもの。あーっ、あんなみたいなマジメ系って、やっぱりからかい甲斐があるわぁ」

「……何でわかる」

「知りたい？」

由忠の顔をのぞき込むように由衣は訊ねた。

「ね？どうしてわかったか、知りたい？ね？」

「……ああ」

由忠は不機嫌そうにそっぽをむきながらそう答えた。

「知りたかったら、おごってよ」

「はぁ！？」

いけしゃあしゃあと由衣は言った。

「いやぁ。実はお金なくてさぁ。ここんところロクなもの食べてないのよぉ」

「お前……なあ」

「おじさん！お願いっ！」

またも両手をあわせる由衣に、由忠はため息混じりに言った。

「ハア……後で返せよ？」

二人が向かったのは近く的高级レストラン。

個室をとった二人の前には豪華な食事が並んでいる。

「うつわっ」

目を潤ませる由衣がたまらないという顔で感嘆の声を上げた。

「食べるー！」

「……どうぞ？」

瀬戸由衣の父、瀬戸昭信^{せと・あきのぶ}とは、あの“倉橋事件”以来、親密な関係を取り続けてきた。

倉橋忍軍頭領である昭信と皇室隠密衆御頭である由忠。

近い立場だけに交流が始まると自然とそうなった。

飲む席があると、昭信は何度となく、息子を得られなかった事を悔やみつつ、それでも由衣を自慢していた。

昭信の口から出る由衣は人格者の手本のような素晴らしい女性だ。実際、剣を交えたこともあるし、何より昭信の紹介で出会った時、由衣が被った猫を由忠は最後まで見破ることは出来なかった。

そして、昭信という枷が外れた由衣は、ついに本性を見せた。

それは、単なる今時の女性としての姿。

怖い者知らず。

礼儀知らず。

無鉄砲。

そして、世間知らず。

……

忍軍頭領の娘として大切に育てられたとはいえ、かなり粗雑な連中の中で育っただろことは、その言動や振る舞いから明らかだ。それにしても、昭信は娘にテーブルマナーも教えていなかったのか？

器量を思うと、残念といわざるを得ない。

（娘がいたら、こうは育てたくないな）

「ん？どうしたの？」

フォークとナイフでガツガツ食べる由衣が、自分を見つめる由忠の視線に気づいた。

「食べたらず」

（個室をとってよかった）

由忠はそう思いつつ、言った。

「よかったら食べる」

「いいの？」

「ああ。ただ、何故、あそこにいたかは教えろ」

「え？いいわよ？」

由衣の口回りはソースでベタベタだ。

「その前に顔を拭け。それから口の中にモノをいれたまま喋るな。あいつらじゃあるまいし」

「あいつら？」

「——関係ない」

「ふうん？ま、いいわ」

由衣はナプキンで口の回りをふきながら言った。

「魔導師達と連絡がとれなくなったのよ」

「魔導師？」

「そう。知らなかった？」

「何故、お前、そいつが魔導師だと知っているんだ？」

「自分でそう言ってた。“俺は魔導師なんだぜ？ベッドの中でたつぷり魔法をかけてやる”って」

「お前、口説かれていたのか？」

「そうよ。あいつら、金もないのにオンナだけは欲しがるんだから」

「物好きもいたものだ」

「何よ。私にセクハラ発言繰り返してたあんたはどうなのよ」

「で？本題に戻るが」

「まったく……別件の仕事でね？」

由衣がワイングラスに手を伸ばしながら言った。

「この国に来たのが3週間前。地元に詳しい人の協力が必要ってことで広井元大使の力借りなきゃいけないからって、あそこにちよくちよく顔出していたら顔なじみになったの」

「広井元大使を知っているのか？」

「当然」

ワインを飲み干しながら由衣は自信満々で答えた。

「私の上客だもの。金はもってるからね。昔、かなり公金横領してたらしくてさ」

「上客？横領？」

「元大使が国元に戻らない理由なんて言ったらそういうことだし

よう？。結構なギャンブル好きだし。何よりあのむつつりスケベぶり。そこから娼婦買い込みまくってるの知ってるもの」

「ほう？」

「もうなんて言うの？カタブツだけど目線がえっちいのよ。私の胸やお尻に集中しててさ。で、あのオヤジや仲間連中にチンチロリンやってたんだけど、その時の貸しが200万レイ程あってね」

「ちなみにレイはルーマニアの通貨単位。100円で約2レイになる。」

「ようするに、お前があのアパートに来たのは、金の取り立てか？」

「そういうこと」

「お前、あんなところで賭場開いていたのか？」

「賭場って程じゃ……そうね。今度、半丁ばくちやってみようかしら。あれなら言葉不要だから……」

「やめておけ」

「何でよ」

「オヤジが聞いたらどうすると思う？」

「分け前よこせっていう」

「……」

「うそよ——でもしかたないじゃない。お金なくなっちゃったんだから」

「何に使った？」

「それが……」

由衣は自分の服を申し訳なさそうに見た。

「成る程？」

それで由忠はわかった。

「ふらりと寄ったブティックが何かでいい服見つけて思わず買い込んだ。それに味を占めて今度はバッグだのなんだの」

「お、お願い！」

由衣はまたもや手を合わせてきた。

しかも今度は涙まで浮かべて。

「これがお頭に知れたら、今度という今度こそ殺される！」

「さて。どうしようかなあ……」

「ね、ねえ！本当に冗談じゃ済まないんだから！」

「オヤジに体でも売れ」

「は、初めてを実の親に売る馬鹿がどこにいるのよ！」

「背に腹は代えられないというじゃないか」

「ふ、ふざけないで！新体制に入った忍軍から与えられた初めての単独任務なのよ！」

「あ、その前にここから国まで歩いて戻らなけりやならないか……何万キ口あるのやら」

「お、お願いよ……私、どうしていいのか」

「ふっ……」

由忠は目元をゆるめて泣き顔の由衣を見た。

ついつい若気の至りで失態を犯す。

それは由忠にも痛いほどわかることだ。

「支度金をそれじゃ、言い訳も出来ないか」

「……ぐすっ」

「で？仕事は成功したのか？」

由衣は小さく首を横に振った。

「何だ？仕事にしくじった挙げ句、道楽に金をつ突っ込んだ。そういうのか？」

由衣は今度は首をタテにふった。

「バカモンッ！」

由忠の怒鳴り声にテーブルの食器が揺れた。

恐らく、店内中に響き渡ったろう。

「仕事も出来ずにそのザマだと！？ふざけるのもいい加減にしろっ！貴様は仮にも忍軍頭領の娘、そんな失態を犯せば、親の昭信殿とて、部下の手前、無事では済まんぞ！」

「わーんっ！！だって、だってえ！」

「だつてもへつたくれもあるかつ！」

声を上げて泣き崩れる由衣に、由忠は容赦がなかった。

「この場で自害して責をとれ！」

「やだあ！」

由衣は泣き叫んだ。

「お願い助けてください！」

「知るかつ！」

由忠は席を立ってドアに向かった。

「ここ払いだけはしてやる！後はどこぞでのたれ死ね！昭信殿には俺から話しておいてやる！」

「お願いですからあ！」

突然、由忠の足にすりつく由衣。

とたんにバランスを崩した由忠がそのままドアに顔面をぶつけた。

「……あ」

呆然とする由衣と

「……」

顔を押さえたまま黙る由忠。

「あ、あのね？」

「……もう、アタマに来た」

そう言う由忠の目は完全に座っていた。

「……へ？」

「貴様、金が欲しいんだっただな」

「う……うん」

「よし。俺が買つてやる」

「ホント！？っていうか、何を？」

「決まっているだろうが」

「……ま、まさか！？」

思わず後ずさる由衣だったが、

「とりあえず１００万は出してやろう——そのトシでエンコーしたらここまで出ないぞ？よかったな」

「や、やだあ!！」

第六話 「ロスト・チルドレン」

「――で？」

朝歸りの由忠を出迎えたのは、あきれ顔のイーリスと、興味深そうな顔の姉妹。

「いや……だからな？」

そう答える由忠は、ホテルの床に正座させられ、その由忠をイーリスが見下ろしていた。

「あの娘相手に一晩お楽しみだったと」

イーリスの手には、携帯電話。

メールの送信ボタンを押せば、そのまま由忠の所業は遥香へ送りつけられる。

絶対のジョーカーを持つイーリスに、由忠は従うしかない。

「お楽しみって？」とエマ。

「何していたの？」とエリス。

「……御父様に聞け」

イーリスはそっけなくそう言うだけ。

「御父様？」

「えつと……お話したり、体操したり」

「子供の前でヘンなこと言わないでください」

イーリスは二べもない。

「お前、子供絡むと性格変わるなあ」

「オンナはそういう生き物です」

「……納得」

「いいですか？完全な強姦ですよ？」

二人にわからないように、イーリスは日本語で言った。

「近衛の幹部、しかも伯爵の地位にいる身が未成年の少女を強姦したといわれて否定できるのですか？みっともない」

「いや、だから」

「それとも、生活の困っているのを見越して、金をちらつかせて売春を強要したとでも？どこまで最低なんですか！」

「……そう面と向かって言われると立つ瀬がないが」

「じゃ、座っていてください」

「……うむ」

律儀に座り直す由忠。

これで近衛の大幹部。

皇室隠密衆のお頭にして伯爵。

私の上司にして、今は仮初めとはいえ、私の夫の立場だ。全く、冗談ではない。

イーリスはそう思いながら怒鳴り声をあげた。

「これが公になって困るのはあなたなんですよ！？」

「……返す言葉もありません」

「しかも、相手は近衛と協力関係が成立したばかりの忍軍の頭領の娘？近衛の敵を作って楽しいですか？」

「……反省しています」

「シャワー浴びてもらっていますけど、何かあったら全て閣下の責任です。よろしいですね？」

「……はい」

「御母様あ！」（×2）

子供達から不満げな言葉が飛んでくる。

「どうした？二人とも」

「私達にわかんない言葉でしゃべっちゃダメ！」

「うむうむ。そうだな」

イーリスは微笑みながら二人のアタマを撫でる。

「全ては御父様が悪いんだからな？」

「うんっ！」

「はあい！」

「……」

ガチャ

浴室のドアが開き、由衣が出てきた。

由忠に脱がされた服ではなく、イーリスの服を身につけていた。

「由衣殿。着替えのサイズは？」

イーリスが駆け寄って声をかける。

「少し丈が長いですけど、問題ありません」

「そうですか。よかった」

「あの……あまり気にしないでください」

由衣は健気にも言った。

「私もくのいちの端くれ。この程度でへこたれていては」
グスツ。

鼻をすする由衣。

気丈な心の裏側にあるものを思うと、イーリスは胸が痛んだ。

「とにかく……食事に行きましょう。そして心を落ち着かせて下さい」

イーリスは由衣と子供達を連れて外に出た。

由忠はホテルの一室で謹慎を言い渡してある。

ちなみにメシ抜きだ。

「本当に、いいんですか？」

由衣がイーリスにそう訊ねたのは、食事が終わり、コーヒーが運ばれてきてからだ。

「問題ない……こらっ。お行儀良く食べるんだ。お行儀悪いと取り上げるぞ？」

「はあい！」

パフェを頼張る子供達に微笑むイーリスに、由衣が訊ねた。

「あの……」

「ん？」

「水瀬由忠殿は一人息子がいたと聞きましたか」

「ああ。水瀬悠理だ。倉橋の一件で出会わなかったのか？」

「いえ……あの」

何故か、由衣は言いづらそうな様子だ。

「どうした？」

「この子達も……あの」

「ん？——あつ！」

イリスは赤面しながら言った。

「この子達は違う！」

「えっ？」

「この子達は私の子ではない！」

「でも、水瀬殿の」

「いや、閣下の血を引く子でもない」

「え！？い、いえ！あの……奥様………というか、愛人の方では、
なかったのですか？」

「わ、私が！？」

「はい」

イリスは慌てて否定した。

「ち、違う！今回は任務で夫婦という立場だが、それはあくまで
任務としてのことで」

「そう………なんですか？」

「なんだ。もしかして、由衣殿」

「由衣………でいいです」

「では、由衣………まさか」

「愛人との間に生まれた子供連れでルーマニアへ旅行に来られて
いた。そこに自分が入り込んであなたに申し訳がないと」

「そんなことはない！」

なんてことだ。

イリスはもう真っ青だ。

由衣の目には私が由忠の愛人で、子供が二人もいると思われてい
たなんて。

もしかしたら、完全に周囲からそう思われているのかもしれない。
いや。任務遂行の上ではありがたいことかもしれないが、かとい

って、一人の女としてはとても有難いとは思えはしない。

（わ、私はこれでも、これでも乙女だぞ？）

まともに恋をしたことすらない身だ。

それが突然、愛人の上に子持ち？

あまりといえばあまりな話だ。

「うそ……じゃ、ないんですね？」

「当たり前だ」

もう怒鳴る気力すらない。

ぐったりと椅子にもたれかかるイーリスは、それでも気を保つためにコーヒーマシンに手を伸ばし、そして、コーヒーマシンがなくなっていることに気づいた。

「？」

テーブルの上を見ると、自分のコーヒーマシンがなぜか子供達の方にあった。

手を伸ばそうとして、

「だめっ！」

子供達から声が飛んだ。

「な、何故？」

理由がわからない。

何故か、子供達が睨み付けてくる。

もつと理由がわからない。

「どうしたというのだ？」

「御母様が一番お行儀悪いもん！」

「だからコーヒーマシン取り上げ！」

「……はい」

「成る程」

場所を移し、一行は公園に出た。

あの騒ぎがあつてから、人身売買の組織は姿を見せない。

それでもイーリスは警戒の目を絶やすことなく、耳だけは由衣に

向けていた。

由衣もようやく心が落ち着いていたのか、会話の端々で笑顔を見せるようになった。

「仕事とは……そういうことか」

ベンチに座って語り合う二人。

子供達はその前ではしゃぎ回っている。

「はい。水瀬殿にはまだ語っていないのですが」

「当然、いいだろう」

イーリスは、由忠の顔を思い浮かべて苦い顔になった。

「正直、我々でも困難な仕事。それを一人でやれなどとは」

「それだけ、周囲が私に高い評価を与えてくれているということ
かもしれませんけど……」

「時に期待は重荷になる」

「……はい」

「だが、それを背負いきらなければならない」

「私、それが出来なかったんです」

「それで、たまりにたまったストレスを買い物で発散した挙げ句、
このザマか」

「……もうどうしていいかわからなくなって、フラフラ町中を歩
いていた時、ブティックのショーウィンドーに並んだ綺麗な服を見
て、“ああ。私もこういうのを着て、普通に生きていく人生があれ
ばなあ”って、そう思ってしまったらもう止められなくなって」

「済まないが、あまり忍びには向いていないな」

「私も、そう思います」

「どうだ？ いっそ結婚して子供作ったらそのまま家庭に引きこも
るというのは」

「……」

しまった。

俯いた由衣をバツの悪い思いで見たイーリスは、内心で舌打ちし
た。

ついさつき純潔を失った娘にかけていい言葉ではなかった。

（どうやら私は、水瀬の言動を叱る資格はないようだ）

心底、そう思った。

「安心しろとまで言わない」

イーリスはフロローのつもりで言った。

「時が解決してくれる。それに、今の時代、処女にそれほどの価値は」

「心の問題です」

（まただ）

もし、ここに穴があつたら、イーリスはその中で頭をかきむしつてのたうち回っていることだろう。

「同じ女として聞きます」

由衣は恥ずかしそうに訊ねた。

「こ、答えられることなら」

「あの……」

「ん？どうした？」

「イーリス殿も、初めての時は痛かったですか？」

「……はい？」

今、自分はさぞ間抜けな顔をしているだろう。

イーリスはそう感じた。

「い、痛かった……ですか？」

イーリスは棒読みでそう言った。

「死ぬかと思いました……あんな太いの、よく入ったと」

「そ、それは……赤ん坊が生まれてくるのですから」

「そう……ですけど」

ちらりとイーリスを見た由衣が、

「皆さん、そうなのかなって」

「そ、そういうものだが……でも、そのうち、痛みは、消える」

子供達がイーリスの側に駆け寄って来て、イーリスに抱きつく。

「そうなんですか？」

「もし、破瓜の痛みが続いたら、女性は子供を作ろうとは思わないでも、人類がここまで増えたのは、そんなことがないからだと思う。それは、人類の数が証明してくれる」

周囲を見ると、同じような子連れの女性が何人も前を通り過ぎていく。

「ねえ御母様！」

そう言ったのはエマだ。

しかも、大声で。

「ん？」

「破瓜って何！？」

「……」

「……」

イーリスと由衣は、共に沈黙した。

周囲の視線が自分達に集まっているのがイヤでもわかる。

「ねえ！破瓜って何！？」

「……な、何だろうなあ」

イーリスは、子供達から視線を外した。

「あーっ！知っているのにウソついている！」

子供達はそう言って顔を真っ赤にしてイーリスを睨んだ。

「ねえ！御母様！」

「教えて！破瓜って何！？」

周囲からのクスクスという笑い声や気の毒そうな視線が痛い。

「帰ったら御父様に教えてもらえ！」

「わかんないことは全部御母様に聞けっといわれたもん！」

エリスが不満そうに言った。

「そう！でね？御父様に聞けっというのは、御母様がズルしてる証拠だっつて！」

「あ、あの男は！」

イーリスは握った拳を振るわせた。

（帰ったら絶対殴る！）

そう決めた。

この場に居合わせたら、絶対に“ざまあみろ”とでもほくそ笑むに違いないのだ。

あれは、そういう男だ。

「とにかくだ！」

イーリスは持っている迫力を総動員して子供達に向かい合った。

「知っている言葉でもそれを説明するとなると話は別だ！御父様の方が口が上手いから、きつと上手に説明してくれるはずだ！だから、御父様に聞け！——わかったか！？」

「……はい」

「……つまんない」

「つまんない？どういうことだ？」

「ようするに、オトコとオンナのことでしょう？」

「そうそう。初めてのことなんだよ？孤児院で聞いたことあるもん」

「ねーっ！」（×2）

「こ……この……！！」（怒）

「あ、あの……イーリス殿？お、落ち着いて」

由衣がそつとイーリスの肩に手を置いて止めるが、イーリスは目がつり上がり、髪が逆立っていた。

「こ、この……」

「わーっ！怖あい！」

二人は、笑いながらイーリスの前から逃げ出し、手を取り合いながら、噴水の向こうの緑の中へと消えていった。

「本当に、親子だと思っているんですね」

クスクス笑いながら、由衣が言った。

「甘えてるんですよ。あの子達」

「なら私は愛情たっぷりにお尻をペンペンしてあげよう」

「ふふっ。母親ですね」

「一応、そういうふれこみになってるのな」

イーリスはそう言ってベンチから腰を上げた。

「エリス！エマ！帰るぞ！？」

返事がない。

「？エリス！エマ！」

イーリスは慌てて二人が消えた方へと走っていく。
由衣も異変に気づき、イーリスの後を追った。

そして――

二人は、子供達を、完全に見失った。

「うーっ。腹減った」

ホテルの一室では、由忠が空腹を抱えてベッドの上へひっくり返っていた。

ルームサービスを頼んだら、「奥様から食事制限中だから、一切のルームサービスには応じないようにと念を押されている」と断られた。

テレポートで抜け出すことも考えたが、財布とカードをイーリスに取り上げられたことに気づき、やめた。

テレポートで金が入るとしたら、それは日本だ。

そこまでするのも何だかバカらしい。

荷物の中に確かスルメがあったな。

そう思い出した由忠が旅行鞆を開いた時だ。

ピーピーピー

携帯電話が鳴り響いた。

イーリスからだ。

「……水瀬だ。どうした？……何？二人がいなくなった？」

由忠は、一瞬、考えた後、

「場所は？ホテルの側の公園……ああ。あそこか。しばらくその場で待て。すぐに向かう」

そう言って電話を切ると呟いた。

「全く、元気盛りというのも、考え物だな」

荷物を漁りながら由忠は思った。

悠理はそんなことなかった。

あいつはヒマさえあれば眠っているような子だった。

そこにいろ。といえば、一日中でもそこに居続ける子だった。

聞き分けがいい子だと、同じ年頃の子供を持つ親から何度うらやましがられたろうか。

「結局」

そういうことだ。

「俺は俺であいつに甘えていたのかもしれない」

探していたものを見つけた由忠は、それをポケットに押し込むと、部屋から消えた。

「すごい変ですね」

由衣も驚いた。

子供達は、二人の前から忽然として姿を消した。

見えなくなったのはほとんど一瞬といってもいい。

緑の生け垣の向こうへ姿を消した途端、本当に姿が消えた。

生け垣の向こう。

そこは一面の芝生。

周囲に人気はない。

レポートでもしなければ消えることなぞありはしない。

「あの子達、人身売買の組織に売られそうになっていたといいましたね」

「ああ。だが、いくら何でも、逃げた子供二人だぞ？」

「誘拐にしても話が大きすぎますね」

「そうだ。あり得たことではない」

真剣に考え込む二人の前に、

「ああ。ここにいたのか？」

そう、声をかけてきたのは由忠だ。

「閣下」

イーリスは力無く頭を下げた。

「申し訳ありません」

「何。悪いのはあの子達だ」

「し、しかし！」

「とっ捕まえてお尻ペンペンだな」

口の端をつり上げる人の悪い笑みを浮かべた由忠がポケットから取り出したのはPDAだ。

「どうするのです？」

「イーリス、俺があいつらにストラップを与えたのは覚えているか？」

「あの？」

「あの中身は発信器だ。衛星で居場所はすぐわかる……ほらな？」
そう言つてイーリス達がのぞき込んだPDAには、一方向へ向けて移動する光が二つ。

「西の方角……この公園を突っ切ってまっすぐ外へ出たな？」

「あの子達……」

「すぐに戻ればいい。程度に思っているんだろうさ。それより。」

イーリスはともかく、由忠

「何？」

さすがに言葉が険悪だ。

先程までイーリスに見せていた優しい言葉のかけらは微塵もない。

「エモノは持っているだろうな？」

「ドスと手裏剣程度よ？」

「なら、俺のを使え」

「イ・ヤ・よ」

「ん？」

「使ったが最後、代金支払えとかなんとか因縁つけて来るんでし
よう？」

「随分、被害者意識だな」

「当然でしょ！？」

「心配するな」

由忠はそれでも刀を由衣に渡した。

「今度はもつと優しくしてやる」

「やっぱりいらないわよ！」

「持て——死にたくなければ」

「死にたくって……何？」

「イーリス」

「はい」

イーリスの方は無言でナイフを抜いた。

「由衣殿、公園は戦場になる」

「敵が？」

「ああ。囲まれた」

由衣には敵が見えない。

だが、禍々しい気配だけは何とか感じる事が出来る。

「気配から数は3。閣下」

イーリスが何かを言おうとした途端、

「！！」

三人は散った。

それまで三人がいた場所に魔法攻撃が着弾し、爆発した。
ただ、爆発音がしない。

「暗殺に特化した連中だな」

「沈黙魔法の一種でしょう」

イーリスは言った。

「以前、何度かこんな魔法を使う敵と遭遇したことが」

「そうか……じゃあ、相手はあんな奴等か？」
「え？」

イーリスの視線の先。

イーリスはその存在を認めたくなかった。

それが敵だと、頭では理解できる。

だが、心では認めたくない。

「ど、どういうこと？」

困惑するのは由衣も同じだ。

「だから、敵だ」

ただ一人、由忠だけは少なくとも、表面上は平然としていた。

「あの姿でターゲットやその周囲を油断させ、そして」

「人道云々以前の問題よ？」

「忍が人道かよ」

「……そういう言い方、やめてよ」

頬をふくらませた由衣が不満そうに頬をふくらませた。

「とにかく」

由忠が指示を出す。

「大した情報は手に入らないだろうが、それでもないよりマシだ。
殺さずに捕らえろ」

「り、了解」

「わかったわよ」

イーリスと由衣は、苦虫を噛み潰したような顔で頷き、そして相手の顔を見た。

数は3。

焦点の合っていないような瞳。

感情が何も浮かんでいない顔。

まるで等身大の人形の様なその手に提げられているのは刀。

その身から発せられるのは禍々しい魔素。

「……」

じつと見つめてくる瞳は憎悪を発し、その口元から見える“牙”が狩りの獲物の血を求めている。

元は人だったのかもしれない。

もしかしたら、まだ、人かもしれない。

その愛らしい外見が、イーリスと由衣に、かすかな希望を持たせる。

バンッ！

“敵”達が、襲いかかってきた。

「殺すな」と言われて幸いだ。

イーリスも由衣もそう思った。

こんな敵、殺したらトラウマになる。

“敵”

それは――

エマ達といくらもかわることのない、年端もいかない子供達だった。

第六話 「ロスト・チルドレン」(後書き)

……すっごいです。

書いていたら、また役所から請求が来ました。

ここまで来るとジंकウスってスゴイと思いませんか？

第七話 「罪悪感と噴水と」

目の前に立つ敵は3人。

全て年端もいかない子供達。

当然、名前なんてわかりはしない。

「おやつあげる」といっても聞く耳を持たないのは明らかだ。

金髪の少女を子供A

黒髪の少年を子供B

黒髪の少女を子供C

仮にそうしておく。

「ち、ちよとどういう事よ!」

事情を知らない由衣が困惑した声を上げる。

「見ての通りだ」

由忠はそう言い放つ。

「あれは、敵だ」

「ってまだ10にも満たない子供——!!」

子供達が一斉に襲いかかってきた。

狙いは一番近くにいた由衣。

三人かがりで剣を突き立てる。

由衣はとつさに後方に下がり、剣を抜いた。

「イーリス。拘束系の魔法は知っているか?」

「残念ながら」

イーリスは答えた。

「私はそちら系の力はありません」

「そうか」

由忠は霊刃を抜きながら言った。

「俺もない」

「どうします?」

「とにかく動きを止めろ」

「はっ！」

ガイン！

イーリスの振り下ろしたナイフを、子供Aは受け止めた。

熟練の騎士の一撃を、子供の華奢な体で受け止めたのだ。

「なっ！？」

驚愕の表情を浮かべるイーリスを無表情な顔で見つめる子供Aは、ガッ！

素早く足払いをかけ、態勢を崩したイーリスの胴に剣を突き立てようとする。

「くっ！」

ナイフで切っ先をそらせ、致命傷だけは避けたイーリスの背後から魔法の矢が出現、子供Aを直撃した。

「やりたくはないのに」

まともに喰らえば無事では済まない一撃。

しかし、それすら——子供は凌いだ。

魔法の矢の直撃を受けたはずの子供Aは、楯にしたのだろう吹き飛んだ左手の痛みを感じる様子もなく、イーリスへと襲いかかってきた。

「くっ！」

ヒュンッ！

イーリスのナイフが一閃し、子供Aの首が宙を舞った。

「この私に、子供を殺させただと——！？」

怒りに震えるイーリスの前で、子供の首が地面に落ち、転がった。首から鮮血が噴水のように吹き出し続ける胴が糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

「……」

イーリスは、呆然としてその光景を見つめていた。

子供の虚ろな瞳から視線を外すことが出来ない。

まるで、瞳に囚われたように、イーリスは体が動かなかった。

それが何か、イーリスにはわかる。

何人も殺してきた自分が、初めて感じる殺しの罪悪感なのだ。

全身の毛穴という毛穴から冷たい汗が噴き出し、胃の中身が逆流する嘔吐感が襲いかかってくる。

「――うっ」

とつさに口元を押さえ、吐くだけは凌いだ。

ようやく子供から視線を外すことが出来た。

だが、その血の臭いだけはどうしようもなかった。

嗅ぎ慣れた臭いが鼻に入った途端、イーリスは耐えることが出来なかった。

その場にへたり込んだイーリスは、吐いた。

何故、殺した？

何故、年端もいかない子供を手にかけた？

そう問われれば、イーリスはこう答えるしかない。

体が動いたのだ、と。

そうなのだ。

魔法の矢を放ったのも、がら空きの首筋を一閃してのけたのも、イーリスの意識とは関係のない、体の反応にすぎない。

今まで、あらゆる修羅場をくぐり抜けても、イーリスを守り続けてきたものが、今度は逆にイーリスを苦しめていた。

胃の中が空っぽになるまで吐いても尚、吐き気がとまらない。

全身が震え、空っぽの胃から胃液を搾り取らん勢いでイーリスは嘔吐感に苦しめられた。

「イーリス」

「イーリス殿！」

由忠達が自分の肩をつかみ、耳元で声をかけているのに、イーリスは全く気づくことが出来ない。

子供殺し。

そのタブーを犯した精神的負担は、他人には理解できないレベル

でイーリスの精神を犯していたのだ。

「やむを得ない」

すでに子供BとCを倒していた由忠は、イーリスの襟首を掴むと、イーリスを引きずって噴水へと向かった。

「どうするのですか？」

「こうするんだ」

由忠は、イーリスの頭を噴水の中へと突っ込んだ。

右手でイーリスの頭を押さえ、左腕にはまったパテック フィリップで時間を計る。

愛人に貢がせた数百万の腕時計で計るのが部下が窒息死しない時間というのも、問題といえば問題だろう。

「由衣、イーリスのバッグにタオルがあるはずだ」

「あるの？」

「子供連れの必需品だ。覚えておけ」

「それより、死ぬわよ？」

ブクブクブク……プクンッ

「おお。いかんいかん」

ジャバッ

イーリスの頭を噴水の中から引き出すなり、イーリスの胸ぐらを掴み、派手な音を立てて往復ビンタを喰らわせる由忠。

「ち、ちよっと!？」

バッグからタオルを取り出していた由衣が驚いたくらい、その音は辺りに響き渡る、つまり、かなりの力がかかっていた。

「この機会に乗じて仕返ししてない？」

「何の話だ？」

イーリスの意識が戻ったのを確かめた由忠が、再度イーリスを噴水の中へ漬ける。

「精神的にパニックになってるだけだ。これほどの子供好きとなれば、この子供達を殺すのは精神的にかなりの負担になったはずだ。

パニックに陥っているうちに痛めつけてトラウマになることだけは避けてもらねばならない」

「イーリスさん、子供大切にしてたものね」

イーリスとエマ達のやりとりを思い出し、しんみりとした口調で由衣は呟いた。

「あの子達と同じ年頃だもの……それは響くわよねえ」

「そういうことだ」

「あのさ。あんたが女斬らないってうのも似たようなモノ？」

「——そうだ」

ジャバツ

噴水からイーリスを引き上げる由忠。

「由衣、タオル貸せ」

「はいよ」

無言でイーリスの顔をぬぐった由忠だったが、

「ちよつと待て」

由衣が由忠の動きを止めた。

「どうした？」

「あんた今、何しようとしたか、言つてご覧？」

「人工呼吸だ。マウストゥーマウスともいう」

「私がやるわよ」

「お前、そっちの趣味が？」

由忠は鞘に入った剣で殴ろうとした由衣の一撃を止めた。

「冗談だ。だが」

「あつ！」

由衣が止める間もなく、イーリスの唇を由忠は塞いだ。

「あ、あつ……あーあ」

あまりの展開にオロオロする由衣を後目に、たつぷり1分間。

二人は唇を重ね合わせたというか、一方が強引に塞いでいたというか……。

とにかく、二人の唇が離れた。

「うむ。美味であつた」

満悦。

いや、むしろ解脱の域に達した感すらある表情の由忠のセリフだ。

「なんか……新興宗教の教祖みたいな表情ね。キケンすぎ」

一部始終を見ていた由衣の言葉だ。

「大体、何よ？私が見てる前で胸は触るわ、ヘンな所触るわ」

「フツ……ヤけたか？」

「思い上がるなアホ」

由衣はきつぱりと言い切った。

「イーリス殿が気の毒すぎるわよ——あれ？」

ちらと子供達の死体を見たはずの由衣だったが、

「ち、ちよつと？死体は？」

「ない」

イーリスを抱きしめたままの由忠はそっけなく言った。

「首を飛ばした程度だぞ？塵になつてすぐに復活する」

「何よそれ、何の話？」

口に出したものの、それが何を意味するのかは由衣にもわかる。

由衣は単に、“そんな奴ら”を相手にしたくないだけなのだ。

「“そんな奴ら”、ブラム・ストーカーにでも相手させておけばいいのよ」

「正確にはヴァン・ヘルシングというべきだが」

「どつちでもいい！」

由衣は気色ばんで怒鳴った。

「とにかく、何でそんなバケモノが襲ってくるの？私は知らないよ？」

「お前もすでに敵だ」

「私は相手は選ぶ主義なのよ」

「そうか……初めてが俺とは、イイ趣味をしている」

「あれは趣味じゃないわ——悪夢よ」

「なら、それから救うのは俺か」

「これ以上喋りたかったら、精神病院の検査結果を持ってきてからにしま」

「首をはねた程度では死にはしない」

「みせな」

由衣は伸ばした掌をちらつかせる。

由忠は、黙ってポケットから一万円札を取り出し、その手にのせた。

「どうぞ喋って。いくらでも」

「どうも。首をはねようが、全身を燃やそうが、すぐに復活する。しかも、日光すら問題とはしない」

「ニンニクでも買ってこようか？」

「無駄だ。ニンニク、日光、流れる水。あんなものは全部、小説家の描いたでっち上げだ。銀が有効なのはわかっているがな」

「……じゃ、どうやって戦うのよ」

由衣は不平そうに言った。

「殺しても死なない相手なんて戦っても意味ないじゃない」

「戦う方法はある」

「銀？頂戴」

「お前に渡せば着服されるのがオチだ。光り物を前にしたオンナは、どんな悪魔より信頼が置けない」

「美女を前にしたあんたみたいなものね」

「……吸血鬼との戦闘は独自だが、きちんと方法が」

「吸血鬼？女から搾り取るあんたそっくり」

「そこまでするか？」

「いくらでも」

「うっ」

二人のやりとりで気づいたのでもないだろうが、イーリスが、弱々しく目を開いた。

「気が付いた——ぐわっ!？」

由衣の右ストレートをかわしたと思った途端、股間への一撃を避

けられなかった由忠が思わずイーリスを手放してしまう。

「……ゆ、由衣」

「あー。知らない知らない聞こえない」

わざとらしく首を横に振りながら、由衣はイーリスを抱きかかえる。

「ゆ、由衣殿？」

「気が付いた？」

「あ……ああ」

「敵は逃げました」

「し、しかし……私は」

先程の戦闘を思い出したのだろっ、イーリスの体が小刻みに震える。

「あれは吸血鬼です。あの程度では死にません」

「死なない？」

「そうです。ですから、イーリス殿は殺したではありません」

「では、仕留めそこなったのか!？」

ガバツ!

「きゃっ!？」

イーリスは顔を真っ赤にして立ち上がった。

「私の一撃が、何の意味もなかった、そうなのか!？」

「何がショックなのかはつきりさせてくださいよ!イーリスさん!」

「子供を斬ったのもショックだが、それ以上に敵を殺し損ねたことの方が、よほどショックだ!」

「……」

口をパクパクさせるだけの由衣。

「あのな……イーリス」

「閣下?どうしたのです?」

「危うく二丁目に転職するところだった」

「はあ?」

「由衣……今夜、覚悟しておけ」
「知らないわよ」

つんつ。とそつばをむく由衣。
「ですから」

「お前、対妖魔戦の経験は？」

「ありません」

「由衣は？」

「実戦経験そのものが初めてよ」

「……そうか」

由忠は少しだけ考えてから言った。

「夕飯が終わったら少しだけレクチャーしてやる」

「戦闘訓練は受けてるって」

由衣は呆れた。という声で言った。

「今更、あんたに教わることがあるとは思えないけど」

「いや」

イリスは真顔で言った。

「お願いします」

「イリス殿？正気ですか？それとも、自信をなくしたのですか？」

「由衣殿。先程の戦闘で全てを悟ったのだ」

イリスは由衣に言った。

「あんな小さな体で力技、魔法の矢——今まで経験してきた戦闘において常に必殺の一撃たりえたものが、単なる小技に成り下がった。今までの感覚で戦えば、いくら私でも危ない」

「……わ、わかったわよ」

講師が由忠というのが、由衣は心底面白くなかったが、生き延びるためには絶対に必要な知識であることはわかる。

「じゃ、ご飯の後ね？」

「ああ」

「ところで閣下？」

「何だ？」

「もう少し、ちゃんと立てないのですか？」

「——言うな。とりあえず、エマ達を探す。それからだ」

「……」

「……」

由衣とイーリスが顔を見合った。

「お前等」

由忠があきれ顔で言う。

「二人の存在、忘れていたんじゃないだろうな」

「や、やだあ！」

おほほほつ。実にわざとらしい笑い声をあげる由衣。

「そ、そんなことは」

視線を由忠からそらすイーリス。

「ま、いい。とにかく、この辺に地下トンネルがあるはずだ。探

せ」

「ねえエマお姉様」

エリスがエマに声をかけた。

「なあに？エリスちゃん」

「もう一度言って？」

「？なあに？エリスちゃん」

「あのね？とっても大事な事に気づいたの！」

「え？なあに？」

「私達ね？」

「うん」

「名前で呼ばれたの、登場してからこれが初めてなのよ？」

「あ、そうだね」

エマもびっくりした顔をする。

「すごいねえ」

「すごいでしょう？」

あははーっ。

実にのんきな姉妹の今いる場所。

それは市内の繁華街。

様々な店が建ち並び、往来もにぎやかだ。

物心ついてからずっと、僻地に住み、そして孤児院に送られた二人にとって、目の前に広がる広い世界はむしろ感動ですらあった。

公園で遊ぶうち、どうしても公園の外が見てみたくなった二人は、いても立つてもいられず、イーリス達に無断で公園を抜け出し、そして今、二人はここにいます。

少し怒られるかもしれないけど、戻ればいい。

二人の感じる罪悪感はその程度だ。

色とりどりの花の並ぶ花屋

見たこともない可愛らしい人形の並ぶおもちゃ屋

おいしそうな匂いのする屋台

見ているだけでも面白い。

二人とも、お金は持っていない。

何も買えない。

それでもよかった。

この世界にいる。

それこそが、二人にとって大切なのだ。

叱られるのが、この世界に足を踏み入れた代償だというなら、安いモノだ。

二人は、そう思っていた。

ドンッ

人にぶつかったのはエリスだ。

よそ見をしながら歩いていたせいで、角を曲がった相手に気づかなかったのだ。

「あ、ごめんなさい」

二人が頭を下げる。

「おやおや。礼儀正しい子達じゃ」

そう言ったのは、ぶつかった相手。

ハ。スの名作劇場か宮。駿の作品に出てきそうな立派なひげ面の老人だった。

ただし、背はそれほど高くない。

エマ達より頭3つ分ほどしかないほど背が低い。

だが、不思議と相手を安心させる笑顔が印象的だ。

「礼儀正しい子達じゃのお」

その老人が笑顔で二人の頭を撫でる。

「えへへっ」

「うふふっ」

人に褒められることに慣れていない二人ははにかんだ笑顔を浮かべる。

「おお。そうじゃ」

ポンッ

老人は手を打つと、肩から提げていたバックから紙包みを取り出した。

「さつき、その店で買ってきた焼き菓子じゃ。どうじゃね？」

「いいの!？」

「わあい!」

「とにかく、叱ります」

イーリスは公園を出た後、そう言った。

公園の芝生の地下は貯水施設になっており、生け垣のすぐ下に点

検用トンネルがあつた。

トンネルは公園の外に通じてた。

公園の外側の出入り口は、上側に柵が張られているため、大人では通れないが、エマ達なら少し這えばなんとか外に出られる。

その柵の端にどちらかがひっかけたのだらう。フリルが一つ、ひっかかっていた。

二人がここから抜け出たのは、これで確かになった。

「まあ、そう怒るな」

由忠はなだめるように言った。

「子供っていつのはああいうものだ」

「しかし！」

「樟葉なんて長野で3日位、悠理を連れて山の中でサバイバルだ。発見された時の言い分がすごかった。“山ごもりごっこ”だそうだ」

「樟葉殿とあの子達を一緒にしないでください！」

イーリスはたまらずそう言った。

「樟葉殿のあのバイタリティが誰にも備わっているわけではありません！」

「そりゃそうだ」

「大体、あの子達は普通の子なんですよ！？」

「まあ……そうだな」

日本語での怒鳴り声。

すれ違う歩行者達が何事かと興味深そうにイーリス達に視線を集める。

「イーリス。とにかく少し黙れ」

由忠は肩をすくめて言った。

「目立ちすぎだ」

「……とにかく、叱ります」

「わかった。やりすぎるなよ？——どうした？由衣」
後ろを歩く由衣がクスクス笑いながらついてきていた。

「いえ？パパとママの会話だっと思って」

「……」

「……」

イリスと由忠は、互いの顔をまじまじと見合った後、ため息混じりに言った。

「むしろ戦友同士だな」

「お互い、苦労しているからな」

「戦友？苦労？」

「子育てだよ」

ピピッ

由忠のPDAがアラーム音を立てた。

「反応があつた。その角を曲がってすぐだ」

「ほお？ハツキ・エマというのか」
道に置かれたベンチに座った老人が、笑みを浮かべながらそう訊ねる。

「そう！」

「私はハツキ・エリスなのよ？」

「ほう？二人とも同じ名前なのかい？」

「ううん」

「ちがうの」

「ほう？」

「私達、今度ニホンジンになったのよ？」

「日本人に？」

老人の顔に奇異の目が走った。

「でね？ニホンジンはファミリーネームが前に来るの」

「ほお……じゃ、エリスちゃんとエマちゃんかい」

「そう！」

「当たり前！」

「そうかいそうかい」

ホッホッホッと笑った老人がバックからさらに菓子を出した。

「たまにはいいかと思うたが、やっぱり、君らみたいな子供が食べるものじゃな」

「いいの？」

菓子を受け取りながら、エマ達もさすがに悪いと思ったのだろう。
だが、

「君らがおいしいと思えば、菓子も喜ぶわい」

「うん！」

「じゃ！」

「こらっ！」

そんな声が響き渡ったのは、二人が菓子に口を付けようとした瞬間だった。

思わず口を開いたままで凍り付く二人。

「エリス、エマ！」

ベンチに駆け寄ってきたのは、イーリスだ。

「こんな所で何をしている！」

慌てて菓子を口に頬張る二人。

「誰も取りはせんぞお？」

のんきな老人の声も、今は二人には届かない。
とにかく、菓子を食べることが大切なのだ。

「さあ、帰るぞ！？帰ったらお仕置きだ！」

「えーっ！？」

「やだあ！」

「約束破った罰だ！——ご老体。大変なご迷惑を」

逃げだそうとした二人の襟首を器用に捕まえながら、イーリスは
深々と老人に頭を下げた。

「いや何」

老人は手をひらひらさせながら言った。

「この子達にはむしろワシが礼をいたいくらいじゃ。こんな年寄りの相手をしてくれたのだからな」

「恐縮です。――閣下、すみませんが手が空きません。このご老体にお礼を」

「ああ」

由忠は財布から札を抜き取ると、老人に差し出した。

「ご老体、わずかですがお納め下さい」

「おや？」

「はっ？」

「お前さん……」

「何か？」

老人が、由忠を指さしたまま、しばらく考えてから言った。

「いつから白人の女を女房にしたんだい」

「は？失礼ですが」

「……ワシじゃよワシ！」

今度は自分の方を元気に指さす老人。

「えつと……？」

由忠は、少し考えた後、ようやく思い出したらしい。
驚愕の表情で叫んだ。

「じ、爺様！？」

「そうじゃ。いや、久しぶりじゃのお。由忠」

第八話 「ジュヌヴィエーヴ」

「ちよつと驚いたわ」

由衣が由忠に言った。

「あんた、おじいさんなんていたんだ」

「俺だつて木のマタから生まれてきたワケじゃない」

「そうね。木が聞いたら気が狂うわ」

「シャレか？」

「イヤミよ」

そう。

由衣ではないが、信じがたいことに、由忠にも祖父が存在する。生命体という観点から考えると当然だが、なんだかそう言いたくなる。

「カッカッカッ」

子供達の菓子を頬張る顔を見て微笑む老人を見た由衣がぽつりと言った。

「8時45分に印籠持たせてあげたいわね。このおじいさん」

「印籠持つのは助さんだろう？」

「格さんよ」

「そうだったか？」

「それでも日本人？」

「それはそれで暴論な気がするぞ？」

「あんたに暴論扱いされるなんて、やっぱり世の中乱れてるわね」

「乱れてるのはお前の頭だ」

「壊滅してるあんたの頭よりマ・シ・よ」

「乱れるならベッドの中で……どうだ？」

そつと腰に回される由忠の手をつねりあげる由衣。

「子供の前でなんて事するのよ！」

「——お前等、ちよつと横向いている」

「これ由忠」

老人が口を開いた。

「遊びが過ぎるぞ？」

「失礼いたしました」

素直に頭を下げる由忠に驚きの視線を向ける周囲にかまうでもなく、

「まあ、なんだ」

由衣とイーリスは、ベンチに座った老人の姿を一瞬見失い、そしてお尻に違和感を感じた。

「これだけの見事なひつぶじゃ」

ナデナデ

「漢として気になるのはわかるがお」

二人が振り返ると、そこには自分達の尻をなで回している老人の姿があった。

ガン

ガンッ

即座に二人の拳が炸裂したのは言うまでもない。

「何も年寄りにそこまですることあるまい……」

頭を押さえながら老人は抗議した。

「一瞬、死んだばあさんの顔が浮かんだぞ？」

睨み付けてくる二人の女性はその言葉に耳を貸すことはない。

「この老人が、閣下の祖父だとよくわかりました」

「最低なのは血筋なのね」

イーリスと由衣の二人からそう言い放たれた由忠こそいい災難だ。つたく、古くは神話にまで出てくる二千年以上の伝統と歴史を誇る家柄って御父様からイヤって位聞かされていたけど」

由衣は老人を睨み付けながら言った。

「水瀬家って、みんなこんなのはっかりなの？力はあるけど頭の中ピンク色ってヤツ？」

「そ、そこまで言うなよ」

抗議する由忠の言葉にはどこか覇気がない。

「それでも、皇室近衛騎士団総隊筆頭騎士、一時は騎士団長までやっただぞ？」

「そんなに弱かったの？当時の近衛って」

「爺様がいた頃は、世界最強だ。特に爺様はな」

由忠は言った。

「ソロモン戦で米大統領警護騎士団と米共和国騎士団の連合軍を全滅させ、ハワイ攻防戦で戦艦10隻仕留めて」

「……どこのモビルスーツよ。このジジイ」

「断つておくが、爺様の母親は瀬戸家の出だぞ？」

「……私達、血がつながってるの？」

「下手に一般人の血を入れると騎士の血は薄まる。それを避けるためには騎士同士の結婚が望ましいことは知っているだろうが」

「そりゃ、そうだけどさ」

由衣は由衣で瀬戸家の血に誇りを持っている。

その血が目の前の男にも受け継がれていると思うだけで、血が汚されているような気がしてならない。

「考え込んだところで始まらないぞ？お嬢さん」

老人はけろりとした顔で言った。

「立ち話もなんじゃ。どうじゃ？ワシの家へ来ないか？」

道すがら、由忠は自分の祖父を改めて紹介した。

みなせ・ただおき
水瀬忠興

近衛には1920年から1975年。実に半世紀の長きに渡り在籍。

その間、左翼大隊筆頭騎士、総隊筆頭騎士、左翼大隊大隊長、騎

土団長、近衛に関する重職のほとんどを歴任すると同時に、“くさび”の通り名を持つ皇室隠密衆お頭として暗躍した伝説的な忍びでもある。

近衛における最終階級は上級大将。

ちなみに、史上、この地位に就いた者は、初代騎士団長土方歳三と彼だけだ。

「近衛の生き字引みたいな方ですね」

さすがに相手が近衛のOBとなれば、イーリスは少なくとも表面的には敬意を払わねばならない。

「外見からは信じられないけど」

反対に、伝説的な忍びでもある老人を前に、由衣は尊敬の眼差しに変わっていた。

「あの“くさび”の顔を拝めるなんて……私、スゴい」

周囲からの視線を浴びながら、老人―忠興―は気にもとめていない。

ただ、エリスとエマを相手にするだけだ。

そこに恐怖の二文字は存在しない。

単なる好々爺。

そうとしか考えられない老人がそこにいた。

「でもさ」

由衣はもつともらしいことを由忠に訊ねた。

「そんな人が、なんでこんな所に？」

「この国は、水瀬家にとってもいろいろ因縁があつてな」

「因縁？」

「……爺様。家は遠いのですか？」

「いや？ ほれ。ついたぞ？」

かつての貴族の邸宅だったらしい古めかしい石造りの建物。
手入れはされているらしく、歴史を感じさせるわりに清潔感がある。

それが忠興の家だ。

その門の前で、

「わーっ！すっごーい！」

エリス達から歓声があがる。

「おじいちゃん、ここに住んでいるのぉ？」

「ああ。そうじゃよ」

忠興は微笑みながら二人の頭を撫でる。

「爺様、一人暮らしではないようですね」

「あ？ああ」

孫の言葉に、忠興はバツが悪そうに頷いた。

「じ、実はな」

「はい」

「その……」

「爺様、モジモジするのやめてください。気味が悪い」

「そこまでいわんでもいいじゃろう」

「お歳をお考え下さい。100を越えてるんですよ？」

「タマにはよかるう」

「初代メンバーの薫陶を受けた方とは思えませんよ」

「何を言うか。沖田さんに斉藤さん、永倉さん。みんなこんなもんじゃい」

「……歴史で名を知るだけでよかったと思います。で？」

「うむ」

忠興が決心したように口を開いた瞬間だ。

「あら？あなた、お客様ですか？」

門の向こうから聞こえてきたのは落ち着いた声。

由忠が見ると、そこには長いブロンドの髪をボンネットでまとめ

た少女が立っていた。

歳は16歳くらい。

息をのむような美少女。

そんな表現がびったり来る。

由忠は不意に、妻である遥香と初めて出会った時を思い出した。そんな彼女は、どうやら土いじりでもしていたらしい。

エプロンが土で汚れていた。

「あ。ああ、ジュヌヴィエーヴ。実はな」

コホン。

「日本人の方ですか？」

「ああ。実は」

「くすつ。そうですか」

ジュヌヴィエーヴと呼ばれた少女は、小さく笑うと、見るからに重そうな扉を開くなり、一礼して言った。

「お帰りなさいませ。あなた」

「どういうことです」

書斎で重々しい言葉を祖父に投げたのは由忠だ。

「何故、ジュヌヴィエーヴがここに？それにあの“あなた”って一体どういう意味ですか？彼女が何者なのか、わかったのですか？」

「あーうるさいうるさい」

革張りの椅子に腰を降ろした忠興は、煩わしそうに手を振った。

先程までの好々爺としての印象は微塵も感じさせない。

あるのは由忠ですら背筋を伸ばさずにはいられない威圧感そのものだ。

イーリス達は別室に通され、今頃はジュヌヴィエーヴがお茶を入れているはず。

それは幸いだと由忠は思う。

この姿は子供達には見せられたものではない。
きつと泣き出す。

「質問は一つにせい」

祖父の言葉に由忠は従った。

「では、彼女と爺様の関係について」

「わかつておるだろう？」

「考えたくすらないのですが」

「あれは、ワシの妻じゃ」

「……ちなみに、何歳違いの？」

「答えたくもないわ。それよりワシの質問にこそ答えんかい」

「はい」

「お主、何故ここに来た？魔法騎士の女と忍び……ワシ等の戦ではまだ使い物にもならん半人前以下の女を二人、さらにあんな子供までも連れて」

「話せば長くなるのですが」

「短くせい。年寄りに長話は禁物じゃぞ？」

「では」

由忠は事務的に語り出した。

自分達は、近衛の任務でこの国に派遣されてきた。

目的は、近衛関係者を殺害した犯人逮捕、もしくは殺傷のため。
イリスはパートナーとして行動している。

由衣は別任務で行動している。任務内容は把握していない。
あの子供達は、人身売買組織から逃げた所を保護している。

「ふむ？」

忠興は不思議そうな顔で由忠に言った。

「なんじゃい。犯人逮捕？近衛は警察に成り下がったのか？」

「犬は犬ですが」

「近衛騎士は番犬ではないぞ」

忠興は言った。

「戦闘犬だ。シェークスピアの歌い上げし皆殺しの犬そのものじや。国家権力を笠に着るだけしか脳のない官憲共とは違うぞ？」

「わかつています」

「なら、その犬が何故にそんなくだらない任務に就く？」

「相手は人ではありません」

「人では、ない？」

「霊体……そう見えています。近衛の関係者を殺傷後、憑依体数名を乗り換え、この国内に逃亡、潜伏していることが判明しています。ただ、追跡任務にあたっていた魔導師が殺傷され、現在は足取りが途絶えています」

「成る程？」

にやりと忠興は不敵な笑いを浮かべた。

「そんな小物とはいえ、近衛の面子が潰されたというわけか」

「はい」

「それで？足取りが途絶えたといっていたな」

「向こうから来てはくれたのですが、逃げられました」

「逃げられた？」

「相手は吸血鬼でした」

忠興が短く息を吸い込んだのを感じた由忠は即座にそう言った。
この歳で罵声は勘弁してほしい。

「吸血鬼？」

「はい。ただし、当初、子供達の追っ手かとも思いましたが」

「違うのか？」

「イーリスが追っ手数名を殺傷していますから。そう思ったのですが、どうやら違うようです」

「ふむ？」

「敵は子供達ではなく、我々を襲ってきたのです。そして子供達には何もしていない」

「それで？吸血鬼と交戦、当然、撃破したのじゃな？」

「トドメはさせませんでした。塵になって逃亡されました」

由忠は言った。

「驚いたのはその吸血鬼達が子供だったことです」

「……子供？子供が吸血鬼になって襲ってきただど？それに逃げられたというのか？」

「仕方ありません」

由忠は弁明とは知りつつも、祖父に告げた。

「イーリスが戦闘不能に陥るアクシデントが」

「ふむ。足手まといがいるのだから仕方あるまい」

「……」

「……」

由忠は祖父の言葉を待った。
数分。

考え込んだままの祖父からの言葉はない。

コンコンコン

ドアをノックする音がした。

ガチャ

「失礼いたします」

一礼した後、入ってきたのはジュヌヴィエーヴだ。

手にはお盆に乗った紅茶があった。

「お茶をおもちしました」

「かたじけない」

由忠は一礼するが、忠興は一切反応しない。

「ふふっ。この人、考え事するといつもこうなんですの」
微笑みながらジュヌヴィエーヴは由忠に紅茶を手渡した。

「この体型でおヒゲしよう？ご近所の方からは“ドワーフおじさん”って」

「……お久しぶりです。相変わらずでなによりです。マドモアゼル・デュドネ」

「えっ？」

ジュヌヴィエーヴがきょとん。とした顔で由忠を見る。

透き通るようなきめの細かい肌。

尖った形のいい顎。

赤みがかった瞳。

それは、かつて由忠がジュヌヴィエーヴ・サンドリン・ド・リール・デュドネと呼んだ女性その人だった。

「あの……失礼ですが」

ジュヌヴィエーヴは小首を傾げながら由忠にそう訊ねた。

「ふふっ……もうお忘れですね。22年前、あなたにお世話になった者です。水瀬由忠です」

ジュヌヴィエーヴは記憶の端にひっかかっていた単語を口にした。

「……由忠さん？」

「覚えていてくださいましたか？」

「ええ。懐かしいですわ」

ちよつとびつくりした。という顔で、ジュヌヴィエーヴは由忠の顔に白魚のような手を伸ばした。

その手は、肌にはひんやりとした冷たい。

だが、不思議と心には暖かった。

「ふふっ。昔は女の子みたいなお顔だったのに」

ジュヌヴィエーヴは慈しむような声で、

「おいくつになられたのです？」

「もう38に」

「あら。もうそんなに？……大きくなりましたね」

「マドモアゼルはお変わりなく」

「うふふっ。今ではマダムですよ？」

イタズラっぽく微笑むジュヌヴィエーヴに由忠は笑って、

「ああ。そうでした。ただ」

「ただ？」

「出来れば御婆様とは呼びたくないのですが」

「まあ、つれないこと」

ジュヌヴィエーヴはすねたような表情で恨めしそうに由忠を睨んだ。

ただ、その目には悪意はない。

「では、どう呼びたいのですか？」

「それに困っています」

由忠は答えた。

「何かいい案はございませんか？」

「さあ。難しいですね」

「難しいです」

「ジュヌ」

ようやく忠興が口を開いたのは、その時だった。

「少し話がある」

そう言う忠興の目が由忠の退室を促し、いや、命じていた。

由忠は紅茶を持ったまま、無言で一礼し、書斎を出た。

階段を降りた先、一階正面玄関脇の一室から笑い声が聞こえてきた。

ドアを開けると、そこではカードに興じるイーリス達と絨毯の上に寝転がって絵本を読むエリス達の姿があった。

二人の回りにはお菓子が散乱している。

「こら」

由忠は紅茶を近くのテーブルに置くと、エリス達の襟首を掴み、持ち上げた。

「お行儀が悪いぞ？」

「うつつ。ごめんなさい」

「片づけまあす」

「そうだ」

そつと絨毯の上に降ろされた二人は、いそいそとお菓子の片づけにかかった。

胃袋へ。

「そうじゃないだろう?」

コッソ。

由忠のゲンコツが軽く二人の頭に触れる。

「まずひとまとめにしてだな」

ちらりと見たイーリス達だが、どうやら二人ともエリス達の姿が目に入っていない。

「御母様達ならダメだよ?」

エマが言った。

「お遊びに熱中しているのよ?」

エリスはそう言った。

違う。

由忠にはわかった。

遊びといえば遊びだが、正確にはギャンブルだ。

勝ち誇った顔の由衣が優勢なのは、由衣側に積まれた札の量でわかる。

「こら」

由忠が二人からカードを奪う。

「ちよっ!何するのよ!」

「閣下?」

由衣からは怒りの、イーリスからは安堵の声が上がる。

「ったく、子供の前、しかも任務中だ。それから由衣」

由忠はカードを改めながら、

「バクチから身を離せ」

「な、なによ。カード返してよ!」

「こんなイカサマするんじゃない」

イーリスの前に飛ばされたカード。

「ち、ちよつと！」

由衣が取り返そうとする前にイーリスがそのカードの仕掛けに気づいた。

「なるほど？」

イーリスが低い声になる。

「あ、ははっ……ばれちゃった」

「私からこんなイカサマで金を巻き上げたと？」

イーリスの手が由衣側に積まれた札を掴む。

「イカサマ見抜けない方が悪いんだけどさあ……あーあ。エリスちゃん達。スゴイことになってるわねえ」

由衣は話題を変えることに成功した。

「え？—— なっ！ えっ、エリス！？ エマ！？」

イーリスが青くなつて二人に駆け寄る。

「あーあ！ 絨毯が！」

そう。高価なペルシャ絨毯が菓子のジャムやジュースでベタベタだ。

「ご、ごめんなさい」

「さあい」

「後で御爺様に謝るんだぞ！？ 一緒に謝ってやるから！」

「はあい」(×2)

「ところでさ」

カードをしまいながら、由衣が訊ねた。

「あんた、おじいさんとは話がついたの？」

「話？」

「え？ここに拠点を移すんじゃないの？」

「いや。それどころじゃなかった」

「それどころじゃない？ 絨毯汚して追い出されるの？」

その由衣の言葉に、エリス達がビクリと反応する。

「追い出されるとしてもこいつらだけだが」

「やだやだあ！」

「半分冗談だ」

「嘘つき！」

「だから半分だ。きちんと謝らないと、追い出されるだけじゃ済まないぞ？ 爺様はああみえて俺よりずっと怖いからな」

「ほ、本当に？」

「ああ。だが、お前等がちゃんと謝ればゆるしてくれる」

「本当ね？」

「ウソはいわん」

二人の頭を撫でながら、由忠は言った。

「あの吸血鬼の件だ」

「どうしたの？」

「爺様に心当たりがあるらしい。今、ジュヌヴィエーヴと話している。その結果次第で次の動きが決まるな」

第九話 「夜の侵入者」 (前書き)

ごめんなさいでした！続きです！

第九話 「夜の侵入者」

「どちらにしても」

夜、由衣とグラスを交わしながら由忠は言った。

「敵、というには、あまりに非人道的だな」

「そうね……」

由衣もその点については異存はない。

「こんな善人の鏡のような男を相手に、あんな子供を出すとは」

「あんだ、脳の検査受けてきなよ」

「今回の敵は気に入らない」

「相手も同じ感想持つてるはずよ？間違いない」

「ずいぶんとイヤミなことばかりいうな」

「客観的な事実といって」

「フン……」

「ねえ」

由衣はずいっと体を前に出しながら言った。

「よく言っじゃない」

「ん？」

「結婚したら変わるって。男も女も」

「違うな」

由忠は言った。

「変わるんじゃない。自ら変えるんだ」

「変えられたの？自分を」

「結婚した以上、それまでの生き方を、多少は変えるのは当然だろ？」

「横暴と無謀と乱暴の塊みたいなのは、結婚してからのこと？次はユーモアのセンスでも身につけたらどう？的が外れすぎて笑えない」

むっ。とした由忠は言った。

「もともとユーモアはある。若い頃は面白い男で通ってたんだ。」

「相当つまらない環境にいたのね」

「チッ」

舌打ちした由忠は、グラスを乱暴に煽った。

「くさびのお頭みたいな伝説的な血を引いてるんだからさ。もつたいないよ」

「——俺がバカやり続けているのは、ああなりたくないからだ」
ポツリと、由忠は言った。

「ああなると悲惨すぎる」

「え？」

伝説のくさびのお頭が悲惨？

由衣は、その意味を把握しかねた。

「どういうこと？」

「大きな声では言えないな」

「小さな声じゃ聞こえないでしょう？」

その通りだろう。

そんな発言は発言ではない。

由忠も不承不承、それは認める。

会議中に後ろの方でゴニョゴニョ。

エライ奴に限ってそうだ。

その後、何かあれば訳知り顔で「だからあの時反対したのに」と来る。

そんなセリフは評論家にだけさせていればいい。どうせ誰も聞いてないんだから。

「もうっ！伯爵が何いちびったこと言ってるのよ！」
ドンッ！

由衣が由忠の背を強く叩く。

「もつとシャンとしな！みつともない！」

グラスを強引に煽った由衣が怒鳴る。

「こういう時は、女がジントと来るようなセリフの一つも決めてさー——ほら、なんていったつけ？しっかりしてなければ生きていけない、とか！」

「……」

由忠はあきれ顔で由衣を見つめ、

「あのなあ」

「な、なによ？」

「いいか？下手な決めセリフなんていうだけバカだ。んなセリフ、マジになって言ってみろ。帰ってくるのは嘲りだけだ。人の心からの言葉を鼻で笑い、虚ろな上辺だけの言葉だけを喜ぶ……それが今のニンゲンだ」

「でも、かなりの地位でしょう？伯爵って。それなら」

「騎士、特に魔法騎士は人間扱いされない」

由忠は、面白くもない。という顔で皿にのったピーナッツを口に放り込んだ。

「社会では異物だからな。いわば人間としては半人前。肩書きと力がなければそんなものだ。わかるだろう？社会で一端の人間として認められない惨めさは」

そう。

それは確かにそうだ。

騎士。

それは栄光の対象であると同時に、差別の対象でもある。

一般とはどこか違った環境。

それが騎士の生きる世界であることは、由衣も否定出来ない。

その経験を思い出し、手の中でグラスを遊びながら、由衣は答えた。

「うんざりするくらい……あーあ。聞いているだけで人間辞めなくなるわ……妖魔か魔族にでもなろうかしら」

「そうさ、くそまじめで通った爺様も親父も、近衛を辞めた後、あんなにかわつちまったのは、そんな気持ちを抑えられなかったか

らだ。全ては人と接したから」

「人と、接した？」

「ああ。昔気質で礼儀を重んずる男達だ。そんな男達の周囲にいるのは、親友面、忠義面はしても所詮は人だ。そんな連中はな？ 親父達の礼儀を酒のつまみにして嘲る。で言うのさ。“バカじゃないか？”とな。だから少なくとも親父は、最後にや回りに人を近づけなかった。そうやって死んでいった」

「でも、そうやって人は生きるものよ？ 多分、その人達だってジヨークのつもりで」

「それを認めたくないのさ。心を開いた相手に裏表はない。言った言葉にも……そう、信じたいから。恐らく、親父達が世間に出るということは、殺意と戦うことだったろうよ」

「昔気質も大変だ——でも、それはアンタも同じじゃない？ あんた、皮肉は言うけど、普通の礼節はわきまえてるからね」

「前者は否定する。後者は認めよう。大いに」

「前言撤回」

「——かくいう俺も」

由忠は、由衣の腰に強引に手を回しながら言った。

「親父達が世間で苦労した理由がこの歳になってわかってきた」

「それって老けたってこと？」

由衣は抵抗するどころか、むしろ由忠に体を預けながらそう言った。

「親父達は世間の、人間の本質が見えていたが、それを受け入れられなかったからだ」

「あんたは？」

「同類さ」

「ふふっ……」

由衣は吹き出した。

「私が抱かれる相手は、一体、何世紀の人なの？」

「永遠の存在さ。女はみんな、そう言ってくれる」

「そのみんなって奴を連れてきなよ」
「取りなしてくれるのか？」
「オトコの仕事でしょ？」

その頃――

NASAのシャトルX-31が大気圏に突入していた。
灼熱化する機内。

そこにいる男達はパニックになっていた。

「ヒューストン！」

「呼び続ける！」

X-31は望んで大気圏に突入したわけではない。

機体の姿勢制御プログラムが突然暴走し、機体が大気圏に突入したのだ。

「マニュアルは！？」

「よし――これだ！」

クルーの一人が緊急マニュアルから該当するページを見つけだした。

「よし！よくやった！」

機長が力強い手でクルーの肩を叩く。

「で？対応は？」

「緊急姿勢制御システムを起動してください！」

「どこだ？」

「コントロールパネル↓パフォーマンスとメンテナンス↓管理ツールの中です！」

「GUIが進化してくれて助かるな」

画面を手早く操作するクルーの様子を見ながら、機長は安堵の声を漏らす。

「よし！これだ！」

これがあれば助かる！

その一縷の望みを賭け、クルーは必要な箇所を開こうとして――

「……」

思わず凍り付いた。

画面表示を見たせいだ。

『緊急姿勢制御システムを使用するには、サービスパック1をお買い求め下さい』

「……ど、どこで拍ってるんだよ」

「捜せ！CDかDVDだ！」

機長が怒鳴る。

「メーカーにNASAが買わされている可能性が高い！」

クルーは四方に散って機内を物色する。

「あつた！」

クルーが高々と掲げるのはCDだ。

「よくやった！」

クルーがCDを読み込ませると――

「インストール作業に30～60分かかります」

うわあああつ！

もたねえよ！

「NASAの技術を信じる！」

機長がクルーを一喝する。

「シリコンバレーを追われてやむを得ず努めてるオタクどもの巣窟が作り出したこのシャトル！ゲーツ程度に負けるか！」

地上に降りたら絶対殺す！

クルーはそう決心する中、画面が動いた。

『インストールが終了しました』

「奇跡だ！」

機内が湧く。

「よし！次の操作だ！」

「了解！」

カチッ

『シリアルナンバーを半角英数字で入力して下さい』

「……」

「……」

「機長！」

静寂を引き裂いたのは、副機長の怒鳴り声だ。

「もうダメです！」

「落ち着け！ハガキを捜せばいい！」

「CDキーは有効期限を過ぎています！」

「……諸君」

うなだれる機長は重々しい声で言った。

「私は、君たちと共に宇宙に行けた。それだけで満足だった」

機内にはむせび泣く声が静に響く。

「だが」

機長は顔を上げた。

その顔は憤怒に満ちていた。

「我々は、ただでは死なない！こんなヒデエOSでボロ儲けするクソツタレのファッキン野郎を道連れにしてやらねば気が済まん！」

「そうだ！」

クルーが叫ぶ。

「あのゲーツを道連れに！」

「ソフト会社の本社ビルを捜せ！こいつでカミカゼアタックしてやる！」

「いや！あいつの豪邸を探せ！そっちの方が分がある！」

「あいつら殺せば俺達は真の英雄だぞ！」

「これで俺達は、人類で最も意義のある死に方が出来るんだ！」

「うおおおおっ！その通りだあっ！」

そして、X-31は流れ星になった。

数時間後――。

ワシントン議事堂のプレスルームでは、連邦議会議長が記者の前にいた。

「X-31は、ホワイトハウスを狙って墜落した？」

「違うでしょうね」

「違う？」

「ええ。突入ルートから考えると、彼らは手動でルートを変更しようとして、半ば成功した。――彼らの目指したのは、ホワイトハウス周辺を買い取って出来たゲーツ邸。――惜しいことです」

否定するプレスはいない。

議長は続ける。

「確かに、X31は大変な悲劇です。アメリカの宇宙計画に与えた影響からすると、シャトル・テキサス以上です……なにしろこいつは、ホワイトハウスにおっこちましたからね。テキサス生まれの

大統領のいる」

「後任の大統領は、副大統領が？」

「そうです」

議長は疲れ果てた顔で頷いた。

「大統領の支持基盤が送り出した彼が、大統領となるでしょう。それがイヤならクーデターをおこされることをお奨めします。人間の尊厳を護るためにも」

「ええ。テキサスは人間じゃなくて牛が選挙権握ってますから」

同じ頃、ルーマニアは深夜を迎え、アメリカでも出来事を露ほども知らない由忠達は、眠っていた。

「……」

スツと由忠が目を覚ます。

「……起きてる？」

由忠に抱かれて眠っていた由衣も目を覚ました。

「敵さんだな」

由忠が起きあがろうとしたその瞬間、

バリンッ！

窓ガラスが吹き飛び、何かが飛び込んできた。

「っ！！」

パッ！

ベッドから跳んだ由忠達は、とっさに武器を構えた。

「ち、ちよつと！」

不意に由衣から抗議の声が飛ぶ。

「なんであんた、服着てるの!？」

「この程度、間男するには必須の技術だ」

「最っ低!」

「褒め言葉ありがとう!」

ギンッ!

霊刃同士がぶつかり合う。

「由衣! 気をつけろ! こいつら魔法騎士だ!」

「わかってるわよ!」

由衣は魔法障壁で攻撃を避けつつ、反撃の機会をうかがう。

「しかも、こいつらまた子供!」

黒装束に全身を包む敵。

顔は隠せても、その背丈までは隠せない。

間違いなく、子供だ。

「殺れ!」

3人の敵を魔法攻撃で一瞬のうちに始末した由忠が4人目と剣をあわせながら怒鳴る。

「情けをかければ死ぬぞ!？」

「わかってるわよ!」

一瞬の隙を見逃さなかった由衣の一撃が、敵の首をはね、返す刀

でもう一体の心臓を貫く。

「ほう？見事なものだ」

「お褒めいただき、どうも」

「お前、パンツはいてねえほうが強いんじゃないか？」

「うっさい！とつと貸せ！丸出して死にたかないわよ！！」

由衣は慌てて足下に転がっていたシートで体を隠す。

「絶景が消える——全人類の損害だ。おい、お前等、どう責任とるんだ？」

敵の数は残り5

その一体が動いたのは、その瞬間だ。

「！？」

「いい動きだ」

由忠がそう言うのも無理はない。

その切れのある動きは、他の者達の追隨を許さない、天賦の才によるものであることは一目でわかる。

由忠は振りかざされる霊刃をかわし、由忠はその一体を羽交い締めにした。

「さあ！どう責任をとる！？」

至近距離からの一撃で全身をバラバラにしてやる。

それが由忠の狙い。

だが——

その体を掴んだ途端、由忠の顔は驚愕のそれに変わった。

「なっ！？」

ドンッ！

由忠の体が吹き飛ばされる。

「バカっ！」

さらに2体を始末した由衣が悲鳴に近い叫びをあげる。

「何やってるのよ！」

サッ

その悲鳴が引き金だったかのように、侵入者達は姿を消した。

「ちよっと！」

由衣は、それでもまだ立ち続けている由忠の元に駆け寄り、乱暴に体を揺すった。

「何やってるのよ！みつともない！」

「……馬鹿な」

そう言う、由忠の顔は真っ青だ。

「はあ！？バカはあんただ一人でたくさんよ！」

「ありえない……いや、あつてはならないことだぞ？これは」

由忠は由衣を無視するように、ドアに向かって歩き出した。

「ち、ちよっと！どうしたの！？」

由衣は慌てて由忠の後に続いた。

第九話 「夜の侵入者」 (後書き)

リングにかかりつきりで続きが書けませんでした。

それにしても、最近、辞書変換がバカになって大変です。
これからもよろしくです！

第十話 「孫と曾孫」

無言で廊下を進む由忠の向かった先。
そこは、祖父の寝室だった。

ドンドン

「爺様」

「由忠か？」

「入りますよ？」

「おう」

ガチャ。

由忠の背後から、その部屋をのぞき見た由衣は、口元を押さえ、
よろめくように後ろに下がった。

月明かりの下。

灯りもない寝室には、二人の影が伸びている。

二人？

そう。

忠興と、その妻の影。

それだけ？

違う。

問題は、その妻の方だ。

「入っていいぞ？すぐ終わる」

「失礼します」

一礼して由忠は部屋に入るが、由衣はどうしても部屋に入ることが出来ない。

その光景を前に、立っているのがやっとだ。

「——片づきましたか？」

「今、必要な情報を仕入れているところじゃ」

由忠と忠興の前。

そこに立つのは美しきジュヌヴィエヴ。

その白魚のような麗しい手は、流れ落ちる鮮血に染まる。

ジュヌヴィエヴに鮮血をもたらすのは、まだ年端もいかない子供
の体。

壊れた機械人形のように痙攣する体。

驚掴みにしたその細い首に口元をつけるジュヌヴィエヴの口元
からは、血を舐める音と、肉を砕く音が小さく、しかし、確実に耳
に届けられてくる。

「……同族喰い（アブゾルビレ）」

「そうじゃ」

由忠達は、目の前の光景に魅入られたように視線を離そうとはし
ない。

「アルハイク 古い世代”の特殊能力とでも言おうか？」

「彼女が……驚きましたね」

「久々の御馳走……とでも言おうか。終わったか？」

完全に動かなくなつた子供の体を無造作に放り捨てたジュヌヴィエーヴは、血まみれになつた顔と絹のネグリジェをそのままに、恍惚とした表情を浮かべている。

「——大したことありません」

「やはり使い捨てか」

「そう見るべきですね。ただ、吸血鬼として見れば、これは奇妙な子達です」

「ん？」

「新たに吸血鬼とさせられた新生に過ぎません」
ノウルサリート

ジュヌヴィエーヴは、血まみれの首を傾げた。

「でも」

「感じたか？」

「はい」

ジュヌヴィエーヴと忠興は由忠を見た。

「由忠」

「はい」

「この館に実に奇妙なヤツが入つた。——わかつておるな？」

由忠はきつく引き締めた顔で頷いた。

祖父が聞きたいのは、高位魔法騎士以上の存在でなければ感じる事のない特殊な気配のこと。

それは、先程、由忠を青ざめさせた気配でもある。

「由忠様？」

どこからか水に浸したハンカチを取り出したジュヌヴィエーヴが由忠に訊ねた。

「私の勘違いであることを祈ります——私は先程、館に二つの気配を併せ持つ存在を感じました。それは忠興さんも同じかと思ひます」

忠興は無言で小さく頷いて同意を示す。

「わが一族特有の気配」

「違う！」

興忠に一喝され、由忠は無意識に背筋を正した。

「あれは異様だぞ！？由忠！」

ツカツカ

グイッ！

忠興は由忠の胸ぐらを掴み、自分の目線まで由忠の顔を引き倒した。

「ワシがない間に、帝国くにで何があつた！？」

「……戦争です」

「知っておる！」

忠興は苛立つた様子で怒鳴る。

「ワシが知りたいのはそんなことではない！——どうして“ソイツ”から我が一族の気配と同時に、松笛の、さらに皇族の血の気配までしたのじゃ！あつてはならんことじゃぞ！？」

「松笛？」

由忠は驚いた顔で祖父を見た。

「皇族は……おそらく、松笛や我が一族に混じった血でしょうが……松笛とは……あの？」

「松笛と言ったら松笛じゃ！我が好敵手にして愛人だったあの松笛じゃー！」

「……」

視線を泳がせた由忠は、ぽつりと呟いた。

「成る程？」

「由忠！」

「息子……悠理の件ですが」

由忠は語り出した。

「松笛本家は爺様が日本を出てすぐに断絶、分家筋の風間家が跡を継ぎました。

ご存じでしょう？魔導兵团にも属していた風間隆信の一族です。

彼の血を継ぐのは、今では一人しかいません。

風間禰子といます。

そう。

明治以来、魔導師として最高峰を誇った松笛家最後の一人なんです。

……この名前を覚えていてください？

父親は不明。母親は風間隆信の娘。内待にして、故鷹男皇太子の愛人とまで囁かれた風間春子です。

現在、近衛では風間禰子は、故鷹男皇太子の御落胤とも囁かれています。皇太子、春子共に死去した後、本人が行方不明の上、個人データが破棄された現状、確かめようがありません。

……コホン。

話を戻します。

紆余曲折の末、風間禰子は、近衛に入ります。メサイアのパイロットとして。

そうです。志願じゃありません。徴兵です。

その彼女と、我がバカ息子が出会ったのが、彼女にとって運の尽きというべきでしょう。

いや、悠理が夢中だと聞いて見に行ったことは数度ありますが、これがかなりの器量で、そこだけはさすが我が息子と……はい。真面目にやります」

「つまり」

忠義は驚いた。というより呆れたという顔で由忠を見た。

「禰子という娘と悠理の間に子供が？」

「発覚した当時、禰子は戦争症で精神科に入院中。とてもではありませんが」

「違っじゃろっ?」

忠義は孫に冷たく言い放った。

「産ませようとはしなかった——欲しかったんじやろう？近衛は、
儂等の情報が」

「……そうです」

由忠は視線を祖父から外した。

「近衛の一部研究組織が、褥子の胎内の子に注目。精神科にいるこ
とをいいことに、褥子の胎内から、まだ安定すらない胎児を、魔
力処理で摘出しました」

「……」

呆然とするジュヌヴィエーヴの顔を見るのさえ辛い。

その子は、由忠にとっては孫にあたるのだ。

「そして……人工培養装置でその成長を観察する日々が始まったの
です」

「で？」

殺気だった声で忠興は訊ねる。

「その不倶戴天の愚か者共は、始末したんだろうな？」

「私が追っているのは、そいつらを始末してくれた者達です」

「ん？」

「半年前、研究施設は、何者かの強襲を受け壊滅、培養槽ごと胎児
は奪われました。——我々が事態を知ったのは、それがきっかけ
なのです」

「——成る程？」

忠興は、初めて合点がいったという顔で言った。

「培養槽の我がひ孫を奪取、吸血鬼化したというのか？」

「それだけではありません。爺様、時間が早すぎます。研究機関の
生き残りの話では、奪取された当時、胎児は魔法処理で成長が促進
されていたといえ、まだ臨月を迎えたばかりと」

「ジュヌヴィエーヴ」

忠興は妻に訊ねた。

「お前は、気配をどう読んだ？」

「そうですね……6歳位かしら？そのように」

「うむ。儂もそうじゃ。由忠、お前の言うことが正しければ、敵は何をしたというのじゃ？どうやって胎児を6歳児に仕立て上げたところ？」

「不明です———そいつらがどうやって成長を促進していたのか……データはすべて盗まれて……いくらなんでも、母さんが絡んでいるとは思いたくないのですが」

由忠にとって、息子と肩を並べる諸悪の根元。その顔を思い出し、由忠はどうしていいかすらわからなくなる。

「その可能性は否定出来まい」

祖父はにべもない。

「もし、神音が知っていたらあの娘、絶対に阻止したろう。じゃが、別目的として大金を積みめば、どうなるかわからん」

「全く……」

「でも……由忠様？」

ジュヌヴィエーヴが恐る恐るという感じで、

「その子を育てて、吸血鬼化させて……何をしようというのですか？」

「遺伝子ですよ」

「遺伝子？」

「その子の……水瀬と松笛の血を引く子供の遺伝子を使って……クローンでも作ろうとしているんじゃないか。私はそう見えています。生まれながらの生体兵器——近衛の研究も、そこに着目した結果始まっていますから」

第11話「夜の出来事」(前書き)

再開です。

第11話「夜の出来事」

まんじりともせず迎えた朝日。

由忠は無言で椅子に座ったまま、身じろぎ一つしない。

「あり得るのね」

由衣がベッドに横たわりながら、そう言った。

「何がだ」

「オンナをベッドで待たせて、そのまんまなんて」

「……そういう気分か？」

「そりゃそうね——よっと」

由衣はベッドに腰を下ろした。

その身につけているのは、薄いベビードール一枚だ。

着やせするらしく、引き締まったラインを誇りながらも、見事なまでの肉体美が布越しに透けて見てとれる。

由忠は、それを目の当たりにして、何もしない。

それが、由衣には意外であり、有難い。

何とも言えないそんな複雑な気分の中、由衣は訊ねた。

「ねえ……さっきの子って」

「……」

「あんたの……孫？」

「そうなる」

「息子さん、いくつだっけ？」

「今年15……いや、16か」

「息子の年くらい覚えておけ。このクソ親」

「……」

「——その、さ」

由衣はベッドに座り直した。

「何があつたか、何が起きてるか。言いたくなきゃ、いいよ？ だけ

ど、仲間と認めてくれるなら」

「……」

「私にも出来ることあれば——ほ、ほらっ！一宿一飯の恩義って
いうじゃない！」

「フツ……慰めているつもりか？」

「悪い？」

「とりあえず、礼は言っておくか」

「バカ、止してよ。気味が悪い」

「それより聞いておきたい」

「へ？」

「隠密衆のお前が、何故、ここにいる？」

「——協力してくれる？」

「内容による」

「……呪具よ」

「呪具？」

「そう。マッシュド・ウオッチ狂時機」

「時間を操作出来るっていう、あれか？」

「そう……呪具を発動させると、呪具周辺の時間を早くしたり遅く
したり出来るって言われているアレ」

「ドラえもんの世界かと思っていたぞ」

「福井県の旧家に眠っていた古い懐中時計がそれ。2年前、魔導軍
が偶然発見したんだけど、福井から輸送中に何物かの襲撃を受け、
奪取されたまま行方不明」

「それが？」

「詳しい事なんて私ができるもんですか。魔導軍が血眼になって探
して探して、ようやくルーマニアにあることがわかったって位しか
「手がかりはあるんだろう？」

「それがあれば苦労してないわ」

「無茶苦茶だ」

「その無茶苦茶やってるから、ヤケになったのよ」

「成る程？」

朝食後、由衣の話を聞いた興忠はあごひげをさすりながら頷いた。

「正直、お嬢ちゃんでは、ちと、荷の重い仕事じゃな」

由衣は、達人からの厳しい言葉を真摯に受け取った。

だからこそ、訊ねた。

「お頭なら、どうされます？」

「お前さんは、どう探していた？」

「国内の古物商、オークションは闇のまで含めて」

「それでは、一生かかっても出会えんわい」

「……」

「まず、お嬢ちゃん。襲撃場所から考えてご覧」

「襲撃場所？」

「日本だ。しかも福井の田舎。そんなところじゃ、東洋人以外はかなり目立つ」

「はあ……」

「東洋人、この場合、日本人が襲撃にかかわっていたと考えて良い
「そうですね——あつ！」

「わかったかな？」

「つまり、日本人達を当たれと」

「正解じゃ。こんな僻地に住む日本人なんて、皆ワケ有と見て良い
わ」

「しかし」

由忠が言った。

「由衣、近衛からの依頼がそんなに白状だとは思えないぞ？何か探索装置の一つくらいは貸し出すはず」

「……」

口元を引きつらせながら、由衣は由忠から視線を外した。

「おい、待て」

「……」

「……売り飛ばしたとか言わないだろうな」

「——ごめんっ！」

ぱんっ。と音を立てて由衣は手を合わせた。

「借金のカタにもってかれちゃって！」

「息子以上のバカがこの世に存在するとは思わなかったわ！」

質屋の店先に飾られていたのは、懐中時計に似せて作られた羅針盤。

精巧な細工が施されたアンティークの逸品だ。

買い手がつかなかったのが不思議なほどの品。

それを言い値で買い取るハメになった由忠は由衣を怒鳴りつけた。

「一体、このバカモノがつ！」

「ごめんなさいっ！」

人通りの多い店先に轟き渡った異国の怒鳴り声に、道行く人々が奇異の視線を送ってくる。

さすがにバツが悪いのか、由忠は舌打ちして歩き出す。

「——で」

「でって？」

その後に続いて歩き出した由衣が首を傾げた。

「理由を言え理由を」

「あ……あのね？」

「——待て」

由忠は言った。

「ギャンブルのカタとか、服代とか、そういうのは理由として認めんぞ？」

「……」

再び、往来に怒鳴り声が轟き渡ったのは、由衣が口を開いて数秒

後のことだった。

「喉が痛いわ」

喫茶店に入った由忠は、コーヒーを飲みながら言った。

「全く、分別というものがないのか」

「――反省してます」

すっかりしよげた由衣が由忠の前で小さくなっていた。

「本当に、昭信殿に報告するからな」

「ええっ!？」

由衣は飛び上がって驚いた。

「や、やめて!」

由衣は泣きながら由忠にすがりついた。

「そんなことされたら、私、お頭に殺されるって!」

「知るか」

「そんなあ!」

「……それとも」

由忠は羅針盤を手のひらで弄びながら言った。

「これをタダでこっちに渡してくれれば、それで手を打つが?」

「……」

じつ。と由忠を、幾分か恨めしそうに睨んだ由衣が言った。

「選択肢が私にあると思ってるの?それ」

「成る程?」

夜、忠興は、その羅針盤を見ながら感心したように言った。

「魔力の特性を読みとらせ、その魔力が存在する方角を指し示す」

由忠が何も言っていないのに、忠興は羅針盤の特性を見事に当てのけた。

「よく出来ておるわい」

「それで」

「指し示す方角は北か——ジユヌ」

「はい？」

「北と言えば、何がある？」

「いろいろありすぎてわかりませんわ？」

「それもそうじゃ——北……か」

「何か、お心当たりでも？」

「いや？それよりあの子達は？」

「もう寝ました。今、イーリスがついています」

「ふむ。二晩連続で来るほど、連中も愚かではないか」

ガッシャーンツ！

ドンドンドンドンドンツ！

ズーンツ！

窓ガラスが割れた音が響き渡ったかと思うと、すさまじいまでの爆発音。

そして激震が屋敷を揺るがした。

「人の屋敷を！」

忠興は激怒して怒鳴った。

「由忠！かまわん！斬れっ！」

「な……何だか、ずいぶんと私情が」

「やかましいっ！」

忠興のかんしゃく玉が炸裂した。

「すでに引退した儂にあるのは、最初から私情だけじゃ！」

爆発音がしたのは、エリス達に与えられた寝室だ。

すでにドアは壁ごと吹き飛び、廊下側の壁もそっくりなくなっていた。

「イーリスっ！」

霊刃を抜いた由忠と由衣が部屋に飛び込む。

「閣下！由衣殿も！」

同じく霊刃を抜いたイーリスが返事をする。

イーリスの背後には、エリスとエマが震えていた。

全員無事。

それが由忠にとって唯一の救いだ。

「敵は！？」

「水瀬ですっ！」

「何っ！？」

「あんなチビでしかもこの破壊力！水瀬以外に！」

突然、息子が攻めてきたと聞かされた由忠は、目の前に立つ敵を凝視した。

敵にしてはあまりに小柄だった。

あきらかに身長は150センチ以下。

小柄な体をフード付きのローブに包み、その小さな手には剣が握られている。

ローブの下から見える手足の細さがむしろ痛々しいほどだ。

殺気はそれほど感じないが、歴戦の魔法騎士としての本能が、相手の実力を教えてくれる。

—— な、何だこの子は。

由忠の背筋を冷たい汗が流れる。

幾多の修羅場をくぐり抜けなければわからないこの威圧感。

由忠は、この感覚を過去に経験したことがある。
それを思い出し、戦慄した。

それは……。

かつて、アレと初めて剣をもって対峙した時。

実の息子、水瀬悠理と対峙した時。

その時と、そっくりだったのだ。

「ま……まさか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6686b/>

暗黒の天使達

2010年10月8日14時33分発行